

ふるりの記録

年中行事篇



川内町老人クラブ連合会編

ふる里の記録

年中行事の毎

川内町老人クラブ連合会

「ふる里の記録」刊行を祝して



人の世の営みは、日々進歩してとどまる所を知りません。身分制度の厳しい封建社会から明治維新へ、全体主義社会から個人尊重の社会へ、さらに科学万能の現代へと一日も休むことなく進み続けます。ことに、大戦後の科学の発達はめざましく、人類の生活環境を大きく向上させました。こうした現象は、物質的側面において著しいものがあり、これに伴いものの価値観が多様化したこともあって日常の生活様式は、

一変されようとしています。物の豊かさの追求は、反面で「心の豊かさ」を失う結果となつていられると言われます。

これに対して、私達の祖先の暮らしはどうだったでしょうか。人々は、周囲の大自然に順応し、それとの調和をはかり、地域の連帯によって生活をたててきたのです。彼岸がくれば祖先の霊を慰め、端午の節句には子の健やかな成長を願い、雨が降らなければ雨乞いをし、秋になれば五穀の豊饒を祈る。私達は、そこに、自然環境との調和をはかろうとする先人の「智慧」と「心の豊かさ」を見出すことができます。

住民の暮らしは、その時どきに記録し、保存しておかなければ、すぐさま歴史という名の波濤に埋没してしまいます。変動の激しい今日の社会では、わずか六、七十年前に私達の父母あるいは祖父母がどのような生活をしてきたのか、それさえすでに遠いものとなろうとしています。幸いにして、今、川内町老人クラブ連合会の手によって明治、大正、昭和三代にわたる我がふる里川内町の先人の生活ぶりが集録され、刊行されることは、時機を得たものとして喜ばしい限りです。ことにこの困難な作業を専門家まかせとせず、一年間にわたりご自身で取材し、記録し、編集されたお年寄の皆さん方の勇氣と根氣に対し、深い共感を覚えるとともに賞讃を惜しみ

ません。

この「ふる里の記録」が、読む方々の心にしみ入って血となり肉となり、明日のふる里づくりの糧かてとなることを切に祈ります。

昭和五十六年十月十五日

川内町社会福祉協議会長

藤井 正

発刊に寄せて

川内町老人クラブ連合会長 東 太市



「ふるさとの記録(年中行事篇)」は、川内町老人クラブ連合会が老人クラブ活動の一つとして取り組んできたものである。若い人達から見ると老人の寝言といわれるかも知れない。

私達は明治の末期を学童期として育ち、大正、昭和と三代にわたり激動の続く社会のなかで生きぬいてきた。

この本は、長い歳月の間に、父母や古老から耳にしたことや、自ら体験した過去のできごとを思い出し、語り合い、検討をかさね老人ぼけしない今のうちに書き残し、これからの人達に伝え後世にまで残したいという願いをこめてまとめあげたものである。

明治、大正、昭和と三代にわたる世の移り変わりにつれ、ひとびとのものの考え方や、日常生活の様式にも大きな変化がみられるようになり、昔のあり方が全く消えてしまったり、薄らいだりしていることは仕方のないことではあるが、ちよつと寂しい気持ちが出てならないのは、ひとり老人のみであろうか。

なかでも祖先から受け継いできたふるさとの年中行事は、春夏秋冬を通じて繰りひろげられ、祖先を祭り家内安全と繁栄を願ひ、五穀豊饒を祈願する宗教的行事や娯楽、親睦をかねあわせた内容のものが含まれている。そして、その行事ひとつひとつがふるさとの心であり、喜びも悲しみもこれらを通じて乗り越え、強く生きていく活力となったものばかりである。

この「ふるさとの記録(年中行事篇)」が発刊される運びに至るまでには、川老連、「昔話を語る会」のみなさんが、十四地区から原稿を持ち寄りみんなで検討し合い、編集委員がそれぞれ分担して執筆した。これは、みなさん方がふるさとを思い大切に作る熱意と努力の結晶であり、そのご苦勞の多かつたことに対し、心から厚くお礼を申し上げるとともに、感謝の気持ちで一杯である。

又、発刊にあたっては町ならびに社会福祉協議会からご指導やご援助をたまわり、さらに多くの方々からご支援や激励をいただき、ここにささやかな冊子の発刊ができる喜びと感謝をかみしめている。そしてふるさとの年中行事の伝承活動が、いつまでも絶えることなく川内町の発展とともに継承されんことを祈念するものである。

はじめに

このふるさとの記録は、かつては各家庭や部落で行われていたことで今は全く失われているものあるいは形骸化して現代の社会生活に直接つながらなくなったり、影が薄くなったものを昔姿そのままに書き残し、次代を担う青少年に何らかのお役に立てばと願ってまとめたものである。

一、世の移り変わり

明治のご一新により庶民の暮らしが根底からくつがえされたのは周知のとおりであるが、その中で千四百年の歴史を持つ仏教に由来する日常生活のあり方や年中行事はなかなか変わりそうではなかった。

例えば、明治の初めに発布せられた太陽暦（新暦）は、官公庁や学校など公的には即時改められたものの、一般の私生活では百年たった今日でもなお太陰暦（旧暦）は生きている。

又、仏教と共に中国から伝わってきた道教で干支との関係も見逃がしてはならない。干支にいう時刻にしても又、方位（方角）にしても以前ほどではないが依然としてごだわっている向きがある。結婚式や建築日に大安を選び、葬儀に友引を忌む例は、その証拠と言えよう。この二重生活や因習は、なお暫く続くに違いない。

大戦後の世相の変貌は全く驚くばかりで、急襲したインフレが貨幣価値を何千倍にも狂わせ、農機具や家庭用品の大型化と電化にはとても老人はついてゆけない。そればかりでなく老人を一番寂しがらせるものにももの考え方の相違がある。ひところ「消費は美德なり」と使い捨ての驕った考え方が横行した。月にロケットが飛び、地球の裏側の実況を茶の間で居ながらにして見ることができるとは言え、不自由を常と心得ている老人にとって、この言葉は苦々しく響く。

私達は、ここでもものの価値観や、ことの是非の判断を論じようとは思わない。この記録は、昔あった姿をこのまま忠実に書き綴ったものである。かりそめにも老人の回顧癖とか繰り言などと言われないうちに自戒しつつ人生の裏方さんに徹したい。

二、編集の動機

いま七、八十歳の者は、生を明治に受け少年期を大正の初期に過ごしている。この時代にはまだまだ古い風習が残っていた。それをこの目で見、この手で使った経験があるばかりか、その光と影は、なお今日まで脈々として頭に手に躍動しているはずである。

時代は流れた。波乱に富んだ明治・大正・昭和の三世代七十年は、平和な時世の何倍かの経験と知識でまたと得難い貴い実績でもある。この生きざまを何らかの方法で次代に語り継ぐことは、現代に生きる老人の務めである。とさえ思う。その故にか各地にこの種の記録本が出版されて世人に喜ばれていると聞く。現に隣町西岡部落では、いち早く刊行され私共に前例を示してくれた。

老人の仕事に今一つ、「老人と子供の対話教室」がある。これは昔の子供の遊び方、風俗習慣を現代の子供に直接知って貰うもので、核家族化が進み、とかく疎遠になりがちな老人と子供の共通の場を求めるものにほかならない。しかしそれも時間が短かく機会も少いので、これを補うためにもこの種の書物が望まれる。この企ては老人自身にとっても大きな欣びと励ましにもなる。

今仮りに川内町で徳川中期の庶民生活の記録や道具が発見できたら何と素晴らしい遺産であろうか。これを併わせ考え、幸いにも町当局のご指導もあってこの度老人クラブ事業の一環として取組むことに踏みきった。

三、取りまとめ方法

とは言っても実際に当たってみると、とてもむつかしくて歯がたたない。昔話の深みと幅は際限がないので、一

応時代を明治の終わりから大正の初めに絞り、幅も年中行事と限定してみた。川内町には十四の老人クラブがあるので、各クラブから二、三人のいわゆる物知りにご登場願ひ、自分の体験談やしきたりを抽出して貰ひ、これを基礎として六人の編集員が分担し纏めた。もともと文筆には縁遠い素人ばかりの寄り合ひで、その荷は余りにも重過ぎた。従つて文脈はマチマチで、とても編集と言へる代物ではない。全くのよせ書きで読みづらい点もあろうがご辛棒願ひたい。

暮らしや行事の中には必ずと言ってよいほど干支や仏教語が出てくる。干支の時刻と方位（方角）は、庶民生活と密接な関連があつて、この理解なくしては年中行事の興味は半減するので簡単に説明を加えておこう。これは前述のとおり十干（例えば甲乙丙丁などに十二支子（ねずみ）丑（うし）寅（とら）等の十二の獣をかみ合わせるもので、その最小公倍数つまり六十でひと回りする。従つて六十一歳の還暦祝はここから出ている。

時刻は、夜の零時を子の刻として、二時間毎に教えて昼の十二時を午の刻とした。だから午の刻より前を午前と呼び、後を午後と区別するのである。

方位（方角）は、真北を子の方角とし、東廻りに東北の角を丑寅（長）と言う。台風は、この方面から襲ってくる。真南を午とし北西の角を戌亥（乾）で終るが、夏の土用風は南西の未申（坤）から吹いてくる。

四、むすび

年中行事の根幹に一貫して流れるものは、人間の力の及ばない五穀豊饒や家内安全を神仏に祈願し、報恩感謝の意を形をもって表わすことであり、これに併わせて人間相互のつながりを密にすることにある。

封建制の名残りである身分や男女の差別、貧富の相異も非情であった。娯楽を楽しむ余裕もなく、何となく暗い圧えられた世に祭りや年中行事は、人間本来の姿を取りもどす息抜きのある場であり時であった。又、粗衣粗食に甘んじていた庶民に対し栄養を補強する数少ない機会でもあった。

戦後、古いものは、壊せよ捨てよとの風潮があったが、最近は古いものの中にその良さを発見する心の余裕も出てきた。昔の行事の姿、形は違っても祖先を敬い人を愛する思慮深い重厚な人生感・処世訓を培うことと信ずる。

今の人から見れば、昔話を聞いて「昔の人は無駄な難儀をしたものだ」とあきれ憐れむかも知れないが、当時としては精一杯の努力であって、生活の知恵であった。この積み重ねが今日のワンタッチで総てがそろそろ豊かな暮らしにつながっている限り、昔は遠くて近いことを痛感する。

終わりにこの企てをご指導下さった西岡の和田三郎先生や町当局並びに老人クラブ員のご協力に厚くお礼申上げる。

昭和五十六年九月 敬老の日

「ふる里の記録」編集委員会委員長

渡部 団正

目次

「ふる里の記録」刊行を祝して

川内町社会福祉協議会長 藤井 正

発刊に寄せて

川内町老人クラブ連合会長 東 太市

はじめに

「ふる里の記録」編集委員会委員長 渡部 団正

一月

正月

正月の準備……………1

お飾りさん……………2

正月の餅つき……………3

おたなさん 門松さん いただきさん……………3

オツゴモ……………4

正月の行事

若水迎え……………5

正月元旦のおとしとり……………6

学校の拝賀式……………7

正月の遊び……………8

鞆初め……………11

山の口あけ……………11

ない初め……………12

七日正月……………12

はたきぞめ……………13

小正月……………14

やぶ入り……………15

念仏講……………15

年始の祈祷……………16

二十日正月……………17

二月

節分……………18

三月

初午さん……………20

春の彼岸……………22

お庚申さん……………23

四月

ひな節句……………26

八月

輪ごし……………53
 虫祈禱……………51
 土用入り……………50
 医王寺入波の話……………48
 石鎚さん……………44

七月

雨乞い……………43
 田休み……………42
 田植え歌……………41
 田植え……………38

六月

井手掃除と水利……………36
 端午の節句……………35
 苗代ふみ……………34

五月

麦うらし……………30
 金ぴらさん……………29
 花まつり……………27

十一月

亥の子……………71
 靱すりまで……………73
 白王さん……………69
 道つくり……………69

十月

秋祭り……………66
 おせんじさん……………64
 秋の彼岸……………63
 曲里の観音講……………62

九月

お月見……………61
 たのもさん……………61
 百八灯……………59
 うら盆……………58
 お施餓鬼……………58
 お盆……………56
 たなばた……………54

十二月

みうま……………77

わたぎ……………78

年貢納め……………80

ふいごまつり……………81

針供養……………82

年末……………83

あとがき

編集委員等名簿



正月

お正月の神様は歳徳神としとくじんと呼ばれ、お米に縁の深い女の神様だといわれている。この神様を座敷にしつらえたおたなさんにお迎えして、恵方えほう（明方あきは）に向けて祀まつる。おまつりしている間は、家がお正月の神様のお社やしろになるわけである。

ほとんどの家は旧暦（太陰暦）で祀った。太陰暦では、正月は立春の頃にあたる。梅の花もほころび、日当たりの良い所では草木の芽が動きだす気配さえ感じられるようになる。すなわち新春である。年賀状に新春とか迎春とかよく書かれているが、これは太陰暦による正月にあてはまる言葉で、太陽暦（新暦）ではまだまだ厳寒の候である。昔の正月のなごりとして使っているのである。

学校や役場など公的などころでは、昔も太陽暦でお正月を祝った。

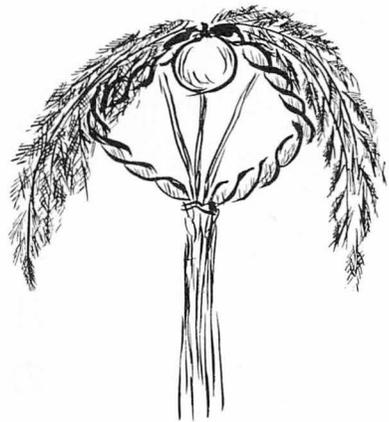
正月の準備

昔は、現金収入が乏しくお金で毎日の買い物をする余裕がなかった。お店の通い帳たなで掛け買いをする習慣があった。盆や年末にまとめて支払いをするのである。お医者さんには特に高額になる場合があるので年末の支払いは容易なことではなかった。お医者さんにかかるのは大病の時くらいで、普通の病気は仕事を休んで

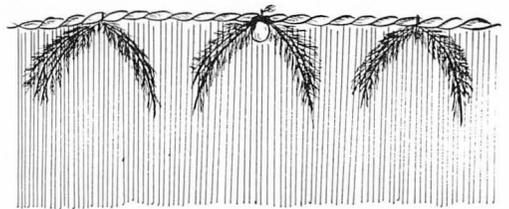
家で煎じ薬をのんだり、お灸をすえたり、祈祷師におがんでもらったりして養生をしていた。今のように保険もなく、貧乏だったので、気軽には病院が利用できなかった。盆の支払いは、年末があるのでどうにか言いがれもできるが、年の暮れの支払いは後がなく、どうにもならず、掛け取りさんに追われて大変なことであった。掛け取りさんの催促にいたたまれず、中には「夜逃げ」といって家族の者がこっそり逃げ出して、他郷に移り住む例も少なくなかった。

年の暮れには御歳暮といつて、お世話になった人に贈り物をして、礼を欠かさなかった。昔のお正月は現在以上に生活の大きい節目になっていたのである。

このようにして一年間の借りをすっかり返して、はじめて年の瀬が越えられるとしたものである。そしていよいよ気持ちも安らかにお正月の準備にとりかかるのである。



輪かざり



しめかざり

お飾りさん

暮れの二十五日頃にお飾りづくりをする。曆でその年の恵方を調べてその方位に向き、床上にごぎを敷いて新藁で鄭重につくる。手につばきをつけないで用意した水をつけて藁の細工をする。これに山くさ(うらじろ)を二枚重ねて付けた輪飾りである。暖簾式のしめ飾りを作る家もある。飾る場所が多いのでお飾りづくりには半日はたっぷりかかった。



12月28日 正月用のもちをつく

飾る主な場所は正月の神を祀るおたなさん、天照大神さんや氏神さんを祀つてあるお床、お大黒さん、お荒神さん、お水神さん、屋敷神さん、又、表玄関や長屋、牛馬の駄屋、便所、風呂場などの入口、そのほか機や石臼、やぐら、鋤や鍬などの農具類にいたるまで数多くお飾りをつけた。おたなさんや床の間、表玄関には暖簾式のしめ飾りをする家もある。

輪飾りは図のように輪の中に三筋の線が立ち、三夫婦揃うようにとの祈りがこめられているといわれている。

正月の餅つき

暮れの二十八日に餅つきをする。まず「いただきますん」や「おたなさん」の鏡餅、神々にお供えする祝い餅、雑煮用の餅、あんこ餅、あられ、はがため用のものまでつくので、家によっては朝早くから夕方まで小一俵の餅をついていた。

当時は、どの家でも塩味のお餅が多く、砂糖あんこはわずかしかつかなかった。経済的な理由からであろう。塩あんこのお餅は焼いて食べると独特な味わいがあった。又、あられやかきもちは高級なおやつであった。ふだんは空豆をよく炒って食べていた。

おたなさん 門松さん、いただきさん

お正月の神様をお迎えする「おたなさん」は、普通は座敷に棚をつるしてつくる。そうして恵方に向けて

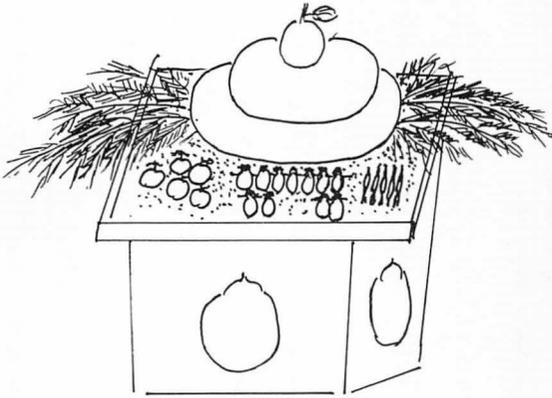
祀る。

門松は、枝が三階になっている松の若木に、三方より松の割り木を立てかけてつくる。ほとんどの家が表玄関に立てる。家によっては小さいのをおたなさんの門口に立てていた。輪飾りと同じように三夫婦揃うようにとの祈りがこめられているという。後年、松を芯にして竹や梅をそろえて作る家を見かけるようになった。

いただきますさんは、三宝

に山くさ(うらじろ)

を敷いて、大きい鏡餅をのせ、その上に橙を置いてつくる。家によっては、くし柿を併わせ置く。又、お米を一升くらい三宝にのせ、そのまわりに柿、みかん、たつくりをそえている。これを元日の朝頭上に



いただきます

いただくので「いただきますさん」と呼ぶのである。

その他正月の行事に欠かせないものとしてオセチ料理がある。オセチ料理は主婦の役目で、煮メ、煮豆、数の子は欠かせないものであった。神様に栗の木の箸を作る家もある。若水汲みの時使う松明、藁束を用意した。家によっては柳の枝に手毬や大判、小判、金玉、銀玉、米俵の模型、餅花など色とりどりにつるし、豊作への願いをこめて、よく人目につく屋内に美しく飾った。

オツゴモ

家の内外のすす払いや掃除をすっかり済ませ、正月の準備万端整えてからオツゴモを迎える。

「オツゴモ」、「オオツゴモリ」又は「オオツモゴリ」ともいうが、十二月最後の日のことである。

まず家長(主人)が門松さんへお正月の神様をお迎えに行く。それは正月の神が門松に降臨するという言い伝えからである。おたなさんにお迎えしてからお神

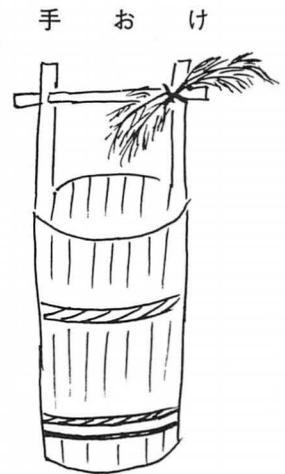
酒やお灯明をあげて拝む。続いてほかの神々にお神明やお灯明をあげて拝む。夕食には縁起そばをどの家でもいただく。今に、十二月三十一日には幸運を願って縁起そばを食べる風習が濃く残っている。オツゴモの晩、座敷のおたなさんにお正月の神様をお迎えすると、いよいよ元日を迎えることになる。

正月の行事

行事の表だったことは男の役目で、すべて家長がりしきる。主婦は、裏方の役目で陰の人であった。正月の三日は家長より遅く起きるのが普通であった。又、外出も遠慮した。

若水迎え

まず家長が、一番鶏どりの鳴く寅とらの刻というからまだ暗い午前四時頃に起きて、身を清め、服装を整えて、一升杵ますきに山くさ(うらじろ)を敷き、お祝い餅、柿、み



かん、たつくりをのせて、お水みづ、神じんさんに供え、お灯明とうみょうをあげて拝む。それからかねて用意して

おいた新しい手桶ておけをさげて水場に行き、松明たいまつのあかりで「福汲む、徳汲む、幸い汲む、よろずの宝を汲みとった」と三度唱えながら若水を汲み取る。若水は、井戸のある家では井戸水を汲むが、普通は川水を汲んだ。昔は井戸のある家はごく限られていたので、一般では川水を使っていた。早朝の流れ川の水は清浄そのもので、口をすすいだり、炊事にまで使っていた。明治の時代は勿論もちろん、大正の時代になつてからも流れ川の水は本当によく澄んでいた。川にはお水神さんがいるといわれていたからゴミや汚物を流すことは罪惡と考えていたからである。

洗面は、大きな藁束わらばきに新しいタオルと鮭さけを吊るしてその下にちょうだらい(洗面器)を置いて汲み取った

若水で恵方に向いて行う。

この時使った藁束は徳島からくる三番叟さんぱそうのでこ回しまわしが挿んでくれた。これをノバセワラといって田植えの時苗代なわしろの苗を束ねるのに使う。なお、若水汲みの時使った松明たいまつの残りは大切にしまっておいて、後日、尋ねたずね



井戸のある家は井戸水で若水迎えをする

人や逃げた牛を探す時使った。それは松明たいまつの煙が尋ね人や逃げた牛のいる方位になびくといういわれからである。当時はほとんどの農家で農耕用の牛を飼っていたから、牛が逃げたはなしはよく聞いたものである。

正月元旦のおとしとり

いわばお正月の式である。家長が汲みとった若水で、雑煮ぞうじを炊たいて、おたなさんをはじめ門松さんや神様にお供えしてまわる。それから主婦や家族の者を起こす。顔を洗い、身を清め、服装を整えてから家長にならつて正月の神をはじめ神々を拝む。家族の者みんながそろったところで「あけまして、おめでとうございます」と正月の挨拶あいさつをする。まず家長が「いただきさん」を拝んでから家族の者が次々といたいて拝む。お父さんの次は長男、続いて男の子、それから主婦、女の子の順番である。お爛酒かんしゅがはじまる。昔は、今でいう数え年で年齢をいっていたから、お正月がくると一つ年をとったことになる。「もう十才になったのだから今

までよりうんとお手伝いができねばいかん」など、家長より今年の暮らし方や抱負などについて話しがある。オセチ料理でお酒をいただいたり、柿やみかんで団欒



阿波の三番叟

して大変喜び、お年玉を沢山はずんだ。

正月の神に供えたお米は大切に保存しておいて、五月に苗代をつくる時「おさんばいさん」に供える。ま

しながら家族の者で話し合って今年の暮らし方が確認

される。おとしとりの式が終わってからみんな雑煮の餅をいただく。

正月三が日の朝は雑煮である。

つい最近まで、

男の子が元日の朝一番に年始の挨拶に来ることを吉と

た、阿波（徳島県）からくる三番叟のでこまわしが藁束を清める際、その年に雇う早乙女の人数だけお幣を清め、このお幣を苗代作りの時「おさんばいさん」に立てて配った。このようにお正月の行事からすでに米作りが始まっているのである。

ちなみに阿波からくるでこまわしは毎年なじみの顔であるが鄭重にあつかい、御祝儀をはずんだ。又、元日の朝早くお大黒さんやお恵美須さんの人形をよく売りに来た。縁起ものなので、値ぎったりしないで買うのが普通であった。

学校の拝賀式

正月の元日には午前九時頃から小学校で拝賀式があり、村長さんをはじめ有志の方々が紋付き羽織に袴をつけて、又、礼服に勲章を沢山つけた在郷軍人さんなど多くの人々が出席して、学校の子どもを中心に拝賀を行い、お正月をことほいだ。

まず校長先生が天皇后陛下のお写真の前で最敬

礼をする。「君が代」の斉唱、「教育ニ関スル勅語」の奉読、続いて校長先生の式辞、「お正月の歌」斉唱の順で行われた。校長先生の教育勅語奉読は厳肅で緊張そのものであったのが特に印象的であった。

式が終わってから子どもたちはみかんをいただき、先生方や来賓の方々は簡単におかん酒をしてお正月をことほいだ。

お正月の拝賀式は、地域によっては戦後も続けられていたが、昭和四十年頃からだんだん行われなくなった。

お正月の歌

(一) 年のはじめのためしとて

終わりなき世のためたさを

松竹立てて門毎かどごとに

祝うきようこそたのしけれ

(二) 初日はつひの光りさしいでて

四方よもにかがやく今朝けさの空

君がみかげにたぐえつつ

仰おほぎきようこそ尊ととけれ

正月の遊び

お正月には、男の子は凧たこ揚げ・こま回し、輪回し・ぱつちん、女の子は羽根つき・かるた取り・まりつき・お手玉（いしなご）遊びなどを楽しんだ。特にお手玉遊びは歌を歌いながらするもので、女の子の代表的な遊びであった。遊び道具はお手玉にしても、凧、こまにしても手製のものが多く、自分で作ったり、父母や祖父母に作ってもらったりしていた。

お手玉遊びの歌

おみんなおさら

お手しやみく落として おさら

お手ばさみく落として おさら

おちりんこく落として おさら

おひどり まいまいどり どりどり おさら

中よせ下もよせ さらりとお手ついで おさら

お一つ屋の大息子お二つ屋の大息子 おさら

やちやない やちやない 落として おさら

おてつぷし まいまいどり おさら

お馬ののりかえ おさら

おかごののりかえおさら

青年仲間では気持ちも浮き浮きと万歳まんざいを踊って楽しんだ。伊予万歳は各地区で大変流行し、青年仲間で一座を組み、招待されて各部落へ出かけて行って踊った。特に豊年踊りは歌い出しに十二の干支えとをとり、軽快な三味線や太鼓のお囃子はやしとめでたい歌のリズムにのって、物腰も柔かく踊る素朴な踊りで、剽軽ひょうきんな次郎松の所作などと共に人気を博した。

おとなは正月礼にいたり、お客さんをお迎えしたり、おかん酒の酔いがまわって御気嫌が良かった。當時はラジオもテレビもなく、寝正月を決め込む者も多かった。主婦は正月礼のお客さんの接待に裏方で忙しかった。

伊予万歳（豊年踊り）の歌

子ねと、サーヨーノ、サヨーノサー

年内夫婦は睦まじく、チヨイト、仲良に

暮らすのが福の神、ヤレ 豊年かいな

チヨイト 豊年じゃ

丑うしと、サーヨーノ、サヨーノサー、

うかうか浮世を暮らすのが チヨイト 十七

八から二十歳はたちまで ヤレ 豊年かいな

チヨイト 豊年じゃ

寅とらと、サーヨーノ、サヨーノサー

隣の宝を数えずと チヨイト 我が家に

宝を招きゃんせ ヤレ 豊年かいな

チヨイト 豊年じゃ

卯うと、サーヨーノ、サヨーノサー

運づくものとはいうけれど チヨイトかせぐに

追いつく貧乏なし ヤレ 豊年かいな

チヨイト 豊年じゃ

辰たつと、サーヨーノ、サヨーノサー

やれたつそれたつ今もたつ チヨイト 国々

廻りてかせぎ立つ ヤレ、豊年かいな

チヨイト 豊年じゃ



昭和初期の伊予万歳

巳^みと、サーヨーノ サヨーノサー

皆さん寄りでの夜話は チョイト これから

世時^{よとき}が世なわる ヤレ 豊年かいな

チョイト 豊年じや

午^{うま}と、サーヨーノ サヨーノサー

うまい世時^{よとき}になりました チョイト 道の間

小草に米がなる ヤレ 豊年かいな

チョイト 豊年じや

未^{ひつじ}と、サーヨーノ サヨーノサー

ひつじの鳴く時油断すな チョイト 心を

たしかに持たしやんせ ヤレ 豊年かいな

チョイト 豊年じや

申^{さる}と、サーヨーノ、サヨーノサー

猿さん親に孝行する チョイト あれ見て

孝行せにやならぬ ヤレ 豊年かいな

チョイト 豊年じや

酉^{とり}と、サーヨーノ サヨーノサー

やれとるそらとる今もとる チョイト いせいの

河原でこりをとる ヤレ 豊年かいな

チヨイト 豊年じや

戌と、サーヨーノ サヨーノサー

いぬくい所に奉公して チヨイト かえりて

我が身の為となる ヤレ 豊年かいな

チヨイト 豊年じや

亥と、サーヨーノ、サヨーノサー

いよいよこれから世なわりてチヨイト明日から

稔りて豊かなる ヤレ 豊年かいな

チヨイト 豊年じや

鍬初め（一月二日）

地区によつては三日にするとところもある。農家にと

つては大切な行事である。

朝早くまず土公神（土の守護神）に湯茶を供える。

これは庭の土に湯茶をまいて吸わせるのである。それから田の神様を祀る。自分の田んぼに行き、山くさを二枚重ねた上にお祝いの餅、柿、みかん、たつくりをのせてお供えをし、恵方に向いて拝み、鍬初めをする。

この日は飼っている牛馬をつれて奈良原神社へお参りをする。奈良原さんは牛馬の神様で地区の氏神さんのお社に合祀してある。

山の口あけ

四日は仕事始めである。農家では男子の仕事としてまず山へ薪をとりに行くのであるが、その日の行事を「山の口あけ」という。

その前に大事な行事がある。それは、家の内外に祀つてあるお飾りさんをおろして一まとめにし、屋敷の恵方に当たる清浄な場所に置く。

さて、山へ入ると、

山の入口には山の神を祀つた小さな祠がある。

そこに持つて来た餅、密柑、たつくり、お幣を供え、今年も無事に



山の口あけ

山の木々がよく育つよう、又、山での災難なきようにと祈る。

お供えの餅のおさがりは、たき火をしながらその火でやいて健康を祈って食べるのである。その後、薪を一荷だけして帰る。昼食には福わかしという料理を食べる。福わかしとは米・餅・なつばで作った雑煮の事である。これを神に供え、家族一同で食して、この日は昼湯に入り、午後は休む。なんともゆったりしたもので、今昔の感がある。

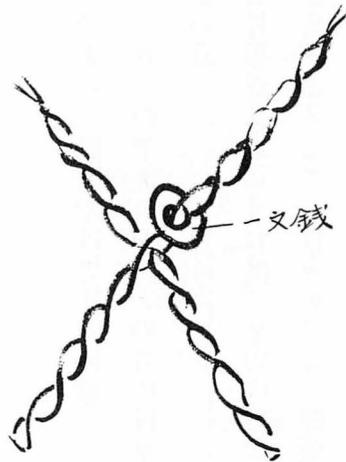
ない初め

山の口あけの日に、雨や雪が降った時、又は、家内作業の最初にない初めをする。今のようにビニール紐などのない昔は、農事用にも家庭用にも、大縄、細縄はなくてはならない必需品であった。だから雨が降る日や夜業などには男も時には女もせつせと縄をない、草履を作ったものである。

そのない初めには藁を二、三本二つに折ってなった

ものを二本作り、一本の中央に他の一本を通し、一文銭一個をその中頃に通し、端を各々結んだものを、お大黒さんに供えまつるのである。その後、牛のくちくだ(牛の鼻木に結び付け、牛をあちこちと追うシユロ縄)や担桶の緒(下肥を入れて担ぐ桶をたごとという。これにつける縄)又、定規縄(田植えの定規を使用する時、標準とするために田の一方のがわに引く縄)などを作るのである。

定規縄は、水に浸すため丈夫でなくてはならないのでシユロの皮でなったのである。



七日正月

七日正月の行事は前の晩から始まる。

六日の晩には家の入り口へなるべく沢山下駄や草履を並べておく。それは、この家には大勢泊り客があるという事を外に知らせ、悪魔除けにするためだといわれている。

又、七日の早朝に神様が巡回して来ても、この履物を見て、昨夜は大勢の客があったのだから、朝寝をしても無理からぬと、お咎めもなく見すごして貰えるのだという話もある。

七日の朝は、家の中の福の神を外に出さないために戸口の敷居に味噌灸をすえる地区もある。

七日の朝は早く起き、七草粥を作つて、神に供え家族全員でいただくのである。

七草とは、ゴギヨウ（母子草）、ハコベラ（ハコベ）、セリ、ナズナ（ペンペン草）、スズナ（カブ）、スズシロ（大根）、ホトケノザ（コオニタビラコ）のことであるが、その内のナズナを用いるのが普通である。

七草粥を作るには、マナイタの上にナスビを置き、片手に庖丁、片手に火箸又は火吹き竹、又はスリコギ（地区により異なる）を持って、「日本の鳥と、唐の鳥

がまだ飛び渡らぬうちに、ナズナ七草セリカリカチカチ」と唱えながら、たたき柔らげて粥に入れて炊き上げるのである。

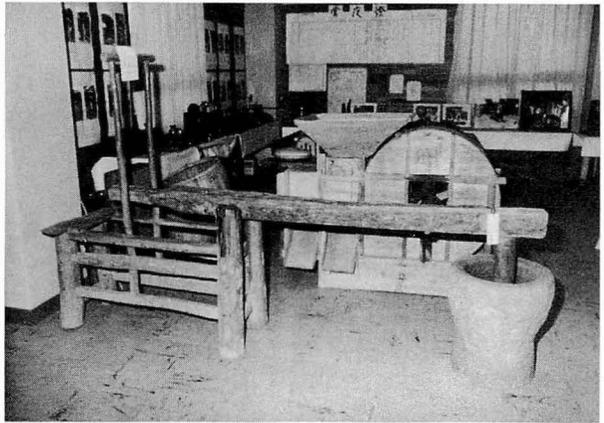
七日の晩はナズナを入れた風呂をわかし、家族全員入浴して健康を祈る。七日の朝は、山の神がオセチを炊かれるので、その煙が目に入ると盲になるといつて、その日の午前中は山に行つてはならないといわれている。

又、九日にも山の神のまつりごとがあるから、山に行つてはならないといわれている。

松の木の枝などに瘤のあるものをよく見かけるが、これは山の神の指図に従わなかった木が、神に打たれたためといわれている。

は た き ぞ め

昔は、精米、精粉は自宅で行っていた。従つてこれらは生活の上では大切な仕事の一つであった。精米については、旧暦一月十一日の「はたきぞめ」の日まで



米つきやぐら（昭和20年代まで使われていた）

は、やぐらを使用
することができな
いので必要量の米、
麦を年末に搗いて
おかねばならなか
ったのである。

精粉については
旧暦一月十一日、
五穀を炒って、ひ
き臼で粉にしたも
のである。

五穀とは、米、麦、大豆、玉蜀黍、粟の五種である。
この日のために、お正月に神様にお供えしたお餅をは
がためのように切っておき、お供え用の皿に粉を入れ、
檜や椿などの常緑樹の葉とこのはがためを添えて神様
にお供えしたものである。

家族はこれに少量の砂糖を入れて食べた。この時、
このはがたい粉をこぼさないように食べると、若い人
は早くよい縁を結ぶことができ、他の者はお金がかたま

るといって、物を大切にすることを教えたのである。
この粉は異郷に住んでいる子や知人に送られその風味
を喜ばれたものである。

この日は、漬物の出し初めも行われる。沢庵漬は農
家にとっては、一年を通じて貴重な副食物であった。
前年に漬けた大根は、この十一日までは手をつけない
でおき、この日に初めて出すのである。时期的にも、
四、五十日になるので丁度よい漬かり加減であった。

小正月

一月十五日を小正月という。大体正月に準じた用意
をしたものである。小正月として特になされたことは、
寒餅を搗くことである。

寒とは、節分前三十日の時期をいい、小寒と大寒に
分れている。一年中で一番寒い季節であって、この時
に一年中使用するはがため、あられ、水餅などを作っ
たものである。

はがためは、年を延べ齡を固めるといわれている。

あられと共に作り、一年中子供の菓子として、又、来客への茶菓として出された風情のあるものである。

赤、青、黄、色とりどりのはがためが、砂糖入り、豆入り、胡麻入りにして干され、色美しいあられが座敷一ぱいに広げ干されているのは子供心に楽しいものであった。

水餅は大きな水がめにお餅をつけておき、時々水を替えねばならなかった。麦のいがが喉にささった時はこの水餅で取るとよいといわれ、麦の収穫時まで保存したものである。

やぶ入り

地獄の釜の蓋も開くといわれた日である。新嫁さんや、奉公人は日頃の苦勞の慰安のため、一泊の休みを貰えるので、この日の来るのを待ち焦れたものである。着飾って里帰りする新妻の姿は無風景な田舎では和やかな情景であった。

やぶ入りは、養父入り、走百病、六入り、十六入りと

も書く。養父入りとは字の如くであり、走百病の語源は、中国ではこの日は遊山して元気を養い、百病を追い払うとのことである。六入り、十六入りは、新嫁さんや奉公人が親元へお土産に餅を持って帰ったその数が、六個又は十六個であったとのこと、このように書かれている。親元では里帰りした子をあたたかく迎える。

子は「親腹七日」の諺のとおり、食べて寝て、縦の物を横にもせず一泊するのであった。又、帰りには沢山な土産物を持たせて帰らせた。わが娘が婚家に帰って恥をかかないようにと配慮をしたのである。

念仏講

部落の小区毎に念仏講があり、この講は古い伝統がある。

各部落により日は一定していないようであるが、十五日の小正月が終わって十六日に「念仏の口開け」をするのが普通のものである。この日当番の家に集まり、融通念仏を唱えて、一年間の無事を祈念する。昔の人

は信心深くふだんから読經どきぎょうの練習をし、自宅において
仏前に念仏を唱え札せ拜するのである。この念仏の時に
正月以来初めて鉦かねをたたいたので、「鉦の口開け」ともい
う。この鉦の口開けが終わるまでは、正月より十五日
の間、もし不幸にして葬儀があつても鉦をたたかぬこ
とになつてゐる。念仏を唱えた後は親睦会となる。

念仏は年に数回唱えるが、葬儀の終わった後では、
新仏に対し組の者全員で融通念仏を唱え、冥福めいふくを祈る
のである。又、盆には組内各家を廻り、念仏を唱え、
なお地藏尊や、由緒ある古木などにも念仏を唱え祈念
するのである。

年始の祈禱きとう

年始の祈禱の行事は、地区により日は一定していな
いが、一月十八日頃が多いようである。

その年の当番を当元とうもとといい、行事を行う者を座元ざもとと
いう。当元は四、五人であるが、座元の家に朝集り諸
々の準備をする。まず山へ行つて小さな雄松おまつ雌松めまつを根

付きのまま持ち帰り、洗つて床の左右に置く。又、お
札をはさむ細竹の用意をする。その他ご飯や色々なお
供え物の準備ができた頃、組中の戸主が集り、やがて
坊さんが廻つて来るとお札たを作り、大般若だいぱんにゃの經文を声
高らかに唱え、一同は神妙に拜む。大般若經卷は随分
沢山あり、重いものであるため、唐櫃からびつに入れて当番の
者二人がかついで、各家を廻り祈禱に参加出来なかつ
た家庭の者達は、その唐櫃の下をくぐつて拜んだ。

昼食は粥かゆと漬物という簡素なものであつたが、昔は
組中の子供も集まり喜んで食べた。

御祈禱ごきとうの行事が終わると、酒肴しゅごうが出て一同和やかに
歓談し親睦をはかった。このとき組の勘定かんじょうや、会計報
告等もあり、一年間の世話人の交代もする習慣になつ
ていた。

御祈禱のお札は地区の入口の道端みちばたに立てて、悪病除よ
けとし、家内安全のお札と祈禱したご飯は、各戸に持
ち帰り、家族の者達でいただいた。

なお、正月のお飾りさんはこの子供ら数名で危険
の無い清浄な川の土手の上や、苗代田ではやした。(焼

くこと)その火で餅を焼いて真黒に焦げたものを食べた。この思い出は古い人なら誰も持っていることであろう。

組の古い帳簿により、二、三、昔の物価を掲載してみよう。昔は米価を標準にして諸物価が定められたといわれている。(下段に掲載)

二十日正月

正月の行事の総てが終わる日である。当日は必ず麦飯を炊いて仏前に供えた。これは、弘法大師が中国から麦種を持って帰られる時に犬に追われるので、足のふくらはぎを切り、その内に隠して帰られた。それ故に麦には筋があるのだと言い伝えられている。その御苦労をしのぶためだと言われている。

この日、組祈祷をする所が多い。組祈祷は大抵お寺の住職を招いて、大般若経をあげてもらい、お守札を作って各戸に配布し、組境には特に大きいのを作って竹に挟んで立て、組中安全を祈願した。

部落によつては氏神様へお参りして、家のお祭りをしてご馳走をし、大人達はそれぞれの趣味を生かした一日を過ごし、子供達は楽しい一日を過ごす慣例であった。

年	米		価				
	1 升	1 俵 (4 斗)	コンニャク 10 ケ	あぶらあげ 10枚	と う ふ 10 ケ	酒 1 升	酢 1 合
明治元年	4 銭 2 厘	1 円 69 銭 2 厘	3 銭 0 厘	1 銭 6 厘	6 銭 0 厘	10 銭	7 厘
〃 10年	3 銭 3 厘	1 円 34 銭 4 厘	5 銭 0 厘	3 銭 0 厘	11 銭 0 厘	24 銭	1 銭 4 厘
〃 20年	3 銭 7 厘	1 円 48 銭 0 厘	4 銭 5 厘	5 銭 0 厘	15 銭 0 厘	40 銭	1 銭 5 厘
〃 30年	14 銭 3 厘	5 円 72 銭 0 厘	10 銭 0 厘	8 銭 0 厘	32 銭 5 厘	65 銭	4 銭 0 厘
〃 40年	14 銭 3 厘	5 円 72 銭 0 厘	50 銭 0 厘	15 銭 0 厘	40 銭 0 厘	95 銭	4 銭 0 厘
大正 6 年	21 銭 2 厘	8 円 48 銭 0 厘	35 銭 0 厘	15 銭 0 厘	6 円 50 銭 0 厘	8 円 00 銭	15 銭 0 厘
昭和 2 年	27 銭 5 厘	11 円 00 銭 0 厘	90 円 00 銭 0 厘		120 円 00 銭 0 厘	425 円 00 銭	
〃 12年	31 銭 9 厘	12 円 72 銭 0 厘					
〃 22年	17 円 50 銭 0 厘	700 円 00 銭 0 厘					
〃 32年	100 円 05 銭 0 厘	4,002 円 00 銭 0 厘					
〃 41年	174 円 40 銭 0 厘	6,976 円 00 銭 0 厘					



節分

新暦は一年を十二月に分けているが、旧暦では二十四節気分類し、なおその上に五節を加え、四季おりおりの時や、気温の移り変わりに生活設計をたてるを常としていた。この新節気の立春の前日は、いわゆる節分で色々の行事が行われていた。

一年の邪気を払い清める作法で、鬼打ちの豆撒きがある。その日は日没までにほうろくで大豆を炒って、まず大黒天にお供えしておく。大黒様は出雲の国主で七福神の中でも一番裕福で大黒頭巾をかぶり、肩に財宝入りの袋をかけて、右の手に打出の小槌を持って、打てば財宝がいくらでも出てくるということである。

家長又は年男になる人は、特別な家では羽織袴をつけて鉢巻をし、扇を腰に差し、普通の家では清潔な着物で、神様にお米・野菜・御飯をお供えして、家族で礼拝をする。夜になると、お供えしてある豆を恵方から撒き始めるのである。その時、年男は家の障子を開け放ち「福は内、鬼は外」と大音声で連呼しながら家の周囲、畜舎も小屋も全部、庭木にいたるまで豆を撒いて巡るのである。「福は内、鬼は外」の音が暗い中から聞えてくる。川向いの隣り部落から、ひょうきんな声で高々と叫ぶ声も聞えてにぎやかであった。畳の上の豆は撒くとすぐ拾うのである。踏むと足の裏にいぼや、できものが出、寢床の下に敷いて寝ると、ばちが当たって病気になると注意された。豆撒きが終わる

と、家族が自分の年の数ほど食べて自分の健康を願った。老人は年の数ほどは食べられず、子供や孫が手伝い長寿を願った。又、厄除けならびに鬼払いに各家の玄関には、タワラ木を五寸（約十五センチメートルくらい）に切って、小割りにし、先にひいらぎの葉をはさみ生の鰯の一片をつけて、（家の神棚や仏壇には鰯をつけない。）門口・裏表の出入口・家畜小屋・廁・湯殿へと全部供え祀った。又、田畑のモグラよけ、並びに悪魔除けにも、神札と一緒に鬼払いの木を立てた人もあった。鬼が戸口へ来ても、ひいらぎや、タラノいばらにひっかかって、家の内へは入れないという信仰心からの行事である。大豆を炒る時には、大豆のなつていた枝がらも豆しばで、ばりばり音をたてて炒る。その



時の炒り加減を見る時は、食わずに大豆の様子を見て知るといつていた。その豆を一升枧に入れてふたをし、神様にお供えをしておき、豆撒きの時にふたを取って裏に水気の多い程、その年の夏には水が多いと言つて占つたという。又、豆を炒った「ホウロク」の温りの冷めない内に、頭にかざすと頭痛を防ぎ頭脳が良くなるといった。自分の年ほどの豆の数を紙に包み、女の人は髪につけたものと一つにして、男は身に着けた肌着と豆を四つ辻に捨て後を見ずに帰ると、厄除けになるといった。男子は禪を捨てて帰るのが一番良いといわれた。「厄ぬいで股間涼しくもどりけり」という俳句がある。豆撒きをしない家もある。昔羅生門に出る鬼を渡辺綱が斬って退治した伝説により渡部家の中には、豆撒きをしない家もある。又、この日は、真言密教、山岳宗教の修験行事、並びに星祭りをして、寺では善男善女の無病長命を祈願するのである。

3 月 はつ 初 うま 午 さん



川上神社は、地元では「大宮さん」と尊称され親しまれている。約六百年前、応永の昔に時の地方豪族河野通久公のご心願によって北方中村字古宮から現在地にご遷宮され、その神名を「川上稻荷大明神」として崇

められていた。稻荷神だから五穀豊饒・悪疫退散・芸能熟練の守り神として信奉されていたに違いない。

明治に入り「川上大宮五柱神社」と改め、郷社に格付けされていたものを昭和十九年、社歴、社殿の風格等から見直され県社に昇格し社名も「川上神社」と改められたものの、大東亜戦争の終結により折角の社格も廃止された。

さて、大宮さんの春祭りである初午祭は、旧二月最初の午の日でこの近郷としては最大の賑わいを呈していた。他に娯楽のない時代でもあるし時恰も長い冬から漸く春の気配が感じられる頃で一種の解放感からでもあろう。

神事はいとも豪華にして厳粛に行われた。この宮司だけでは足りないのです、他の神社からも十名くらいの神官に加勢を願ひ、神前に山海の幸をうやうやしく供え、五人囃子の雅楽に合せて両手に舞鈴を持った緋の袴の巫子が古式豊かに「鈴かぐら」を舞い納めた。ご神酒は、巫子に替わった紋付羽織の世話役がかわらけについで参詣者に戴かせる。又、特別に祈念を希

望する者には神官自ら大祓をして祝詞を奏上した。

三回の福入り餅撒きや打上げ花火は祭り気分を一層盛り上げ、相撲の鬨の声はあたりを圧倒した。

境内の催し物は他の縁日と変わりはないが、その規模が大型で活気に満ちていた。

何といつても初午講による参拝者は三百人に余り遠く上浮穴郡の面河から、あるいは三津浜、北条などから来た。講員の接待は酒・肴で賄い満足してお帰りを願わなければならぬので多忙で気疲れがした。

演芸・相撲・露店商の割り振りから爾後の世話まで大変だった。

子供等は二銭か三銭でサトキビ・赤い飄箆型の瓶に入ったニツケ酒、ハイカラ館を買ったり風船玉のゴムホーツキを膨らませ音を立ててしぼむさまをみて喜んだ。男は相撲を、女は伊予万歳をそれぞれの席で楽しんだ。一番面白いのは、「のぞき」と言って大きな看板に物語り式の絵を並べ、一段高い所の板敷を細い割り竹でたたきながら歌を歌うように物語を聞かせるのである。たたくと音があたりに響いて他の呼び声も消え

てしまうほどであった。

見物人は板敷の下にある「のぞき穴」から片目で見ると、それで身も心も躍った。題は悲恋の「不如帰」や「金色夜叉」が多かった。



初午さんのにぎわい

夜は初午講堂で素人浄瑠璃が語られ老人を喜ばせた。お隣の常設館、名越座ではその頃流行の連鎖劇芝居で新派を演出した。

大宮さんの上境内にある玉垣は明治十二年に建設されているが、下の石段と玉垣は大正八年に建てられている。鳥居と一对の狛犬は市場区の寺田という人が、成功したのは神様のおかげと、大正九年に寄進している。

約六十年前の大正年間が、町内の景気もよく川上神社の最盛期であつたといえよう。

初午祭は今も連綿と続いているが、戦後を契機として昔の面影や活気が今一つ盛り上りに欠けると見るのは老人のひが目だけだろうか。

春の彼岸びんがん

「暑さ寒さも彼岸まで」と諺ことわざのとおりである。農家では、これをさかいにして野菜類の種まきをする準備から、麦類の除草・土入れをし、山林へ杉・松苗を植えるので多忙になる。

人の気持も冬から春へと移り変わって温い気持も起こつて来る。彼岸二、三日前から先祖の墓掃除をして、しきみのはなを立てておく。彼岸に入る日には入りばなを立てないことになっていた。家のうちでも仏壇をきれいに掃除するにはなを立てる。昔は石臼いしうすで米の粉をひいて自家製の団子やおもちこ、草餅をつき、また五色の菓子を供えて祖先の法要をしたのである。

彼岸の入りに家族が墓前に参拝をして、彼岸の終りの日も彼岸のさめといつて墓参をするのであつた。

先祖の墓を残して異郷にいる人は、知人や親戚の人に墓守を依頼している。特に気の毒なのは子供が絶えて墓守のない墓で、掃除は近所の墓守が見かねて、はなを立ててあげることも度々ある。

中日ちゅうじちとなると、朝一番に国旗をたてるのは、その家の学童の責任としていた。この日は特別なことのほかは、農家も仕事を休み、夜はちよつとしたご馳走をして家族一同くつろいだのである。

皇室では、春季皇霊祭しゅんきこうれいさいで歴代の天皇陛下の御霊をお祀りする大切な行事である。役所も学校も休業した。彼岸の中日は夜と昼の時間の長さが同じである。

新婚家庭では餅をついて、里親の家へ「彼岸見舞い」といつて一日休みに帰らせる風習があつた。又、里親は娘を婚家へ帰らせる時は、牡丹餅ぼたんもちを作つて土産にもさせたのである。

新仏しんぼつのある家には、親戚縁者・知人より彼岸見舞いといつて、お供えに餅や饅頭まんじゅうが、重箱やいれこに入ら

れて届けられたのである。特に目立つのは、五色の饅頭で一個四、五銭くらいであった。たくさんもらうので、近所へも仕末を頼んだ。寺では、彼岸中に檀徒の法要をするため、部落ごとに日割して、法印さんに廻ってもらう。法印さんも一日に何軒も勤めると、非常に疲れて塔婆とうばに字を書くとき失敗をしたこともあった。彼岸と「ヒーガン」の争いで舅しゅうとと嫁が仲が悪かった。ある日、舅が法印さんに「ヒーガン」が本当かと尋ねると、法印が、「ヒーガン」でもわかるといった。土産の餅を置いて帰り、舅が嫁に、法印さんが「ヒーガン」でもわかると言ったと告げた。すると、今度は嫁さんが牡丹餅を持って法印さんに、「彼岸が本当ですか」と聞くと、法印さんは、彼岸が本当だと答える。嫁さんは満足し牡丹餅を置いて帰った。「彼岸」と「ヒーガン」の争いで得をしたのは法印さんであった。家の内はみんなで仲良くしないと損をするし、又、不愉快がつのると互いに病気をするから仲よくするようにとの教訓であろう。

お 庚 申 さん

宮東区の中程にあまり目立たないが、慶長の昔から小さなお寺がある。

滋賀県大津市、園城寺寺門派の末寺で一王子中山寺なみやまじの号があるが、町筋では「お庚申さん」と称え敬っている。

本尊は青面金剛不動尊で、拝めないが山岳宗教、石鍾本尊の不動尊に通ずるもので「石鉄山一王子」の寺号も掲げている。

この寺には定まった檀家だんかはないが、平素から加持祈かじき禱とう、よく当たる占術せんじゆつに遠くから来る信者が絶えない。川内には真言宗や禅宗の寺院が数多ある中に、独り天台宗門を守っているのも珍しい。

この本尊を祀る春の行事は毎年三月二十八日に近郷の山伏修験者三十余名ばかりの加勢を得て「揲燈大護摩火祭まのひまつり」（火渡りの祭典）が執行されている。

当日は表の庭に大きな木を井型いがたに組み、その上に青

い生の松木柴を山のように積み重ね、これに火を焚きつける。と忽ちパチパチと激しい音をたてて燃えあがる。黒い煙は風に乗って空高く流れ、紅蓮の炎は天を焦がす。この荒行に相和して山伏が経文、呪文を唱える。

盛装した行者は、

錫杖を振り鳴らし法螺貝を吹き、境内は異様な空気に包まれる。

火がおさまると、まだ残り火のあつる熱灰の中を山

伏は呪文一喝、裸足のまま渡り

始め、続いて一般信者も裸足でおそろおそろ渡

る。山伏は一人一人エイツと気



護摩を焚く

合を付けてくれるが、この難行に一人として火傷や落伍する者はない。

これでこの年は無病息災、家内安全の祈願が叶ったと安堵の胸を撫でおろす。周囲を取巻く参詣者もこのさまをみてほっとした。

話は変わって一般の慣わしに移る。

庚申とは干支の「かのえさる」に当たる日で、干支の組合わせによつて六十日毎に巡ってくる。従つて年六回としたものだが稀に七回ある年もある。その年は万事縁起がよいとされていた。

庚申は、青面金剛不動尊の別の称えで中山寺の本尊でもある。

この日は、本尊を祀り家族の者は夜更けまで起きているか別に信者が集まって共に長話で時を過ごす慣わしであった。これは昔、中国の道教の教えで人間が寝ている間に人体にある悪い虫が災して短命になるとの古い言い伝えである。

庚申と名のつくものに庚申風邪がある。庚申風邪を引くと軽い鼻風邪ではあるがなかなか治り難いとされ

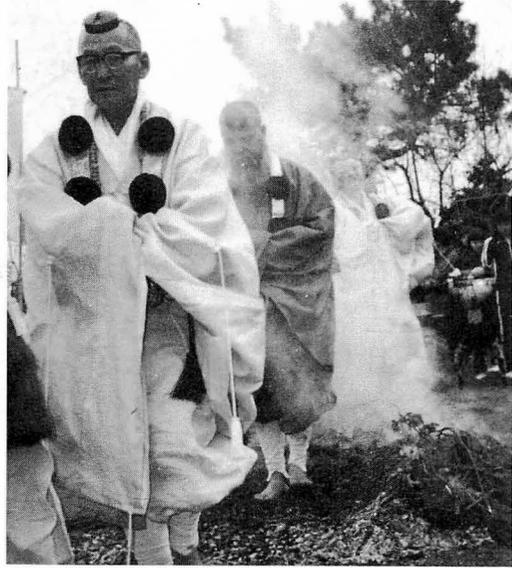
ている。

また、庚申塚と

火 渡 り

か庚申堂（庵）は
青面金剛不動尊を
安置した所で、よ
く田舎の山道など
に残っており休憩
所にもなっている。

東谷、中組に安
政年間に始まった
と言われる庚申講
が続いている。組



中を五班に分けて正月、五月、九月の大切な月には順
廻りに神官を招き家内安全を祈り、後で持ち寄った米
や野菜で炊いたゴモク飯等で長い夜を話し合う。中に
は親子、夫婦連れで参加する者もいた。

この組では観音講、大師講、それにこの庚申講は明
治・大正を通じて今に及ぶ。神仏を尊び、郷土を愛し
絶えず親の後ろ姿をみて反省し暮らしに気をつけてい

る。

講はこうした念願の現れであって、いつまでも
続けてほしいと古老は願っている。

4 月

ひな節句



旧暦三月三日はひな節句である。現在は一月おくれの四月三日に行く。一年中で子供も大人も、待ちに待った楽しい行事である。「今年は親戚に初節句の家が三軒と近所に二軒とで五軒もあるので、わしゃせこいかい」と節句話のついでに、うれしい悲鳴を聞かされ

た思い出もある。昨年の節句以降に生まれた子供は、今年の初節句のお祝いを受けるのである。昔は、男子は土で作った武者人形、たとえば坂田の金時とか、鯛をかかえた大黒様や、武内宿弥、加藤清正などをもらった。天神様は掛軸にもあった。それらを贈って元気で学問がよくできるように祈念する。女の子には、神功皇后の土人形で、高さ四十七センチくらいあるのを贈り、又家によっては、しよぼでこを贈った。上等のものはお腹を押すと幼児の泣声に似た音を出すので珍らしかった。又、娘さんの裁縫の稽古に着物を縫って贈る家もあった。お祝いを貰った家では、雛壇を作って赤い敷布を掛けて何段にも古いものや新しい人形を並べて、桃の花や桜、椿の花を立て、お供えは五色のひし餅、リンマン、餅菓子、ようかん、巻ずし、五色のあられなどをずらりとお供えした。白酒もあつてまことに見事であった。たかきびのひし餅を食べると、婦人病の予防になるとか、腹の病気になるにいくとか言われていた。

三日の夜は、親戚や知人、近所などお祝いをもらっ

た人を招いて、その家なりのご馳走をして一夜を歌い語り明かしたのである。電気のない時代は、雛さんの灯明は、豆ランプであった。種油の場合は油を皿に入れた芯を入れて火をつける。ほかにはローソクの明かりがあったが、いずれもほの暗く気持の悪いものであった。三日、四日は子供らは各家々の雛人形を見せてもらいに行った。

四日は花見で、公園や土手の桜の花の下で、ご馳走の重箱を開いた。花びらが散り込み風情があった。川端や池の土手で子供も大人も一緒になって、仲よく花見をしたこともあった。吹上池の土手では、大人が酒に酔って、大虎小虎も誕生した。節句に仕事でもすると変人あつかいにされた。「のらの節句働き」といって、かげで嘲笑されたものである。四日の花見に雨が降ると、子供らはおのおの部落の会堂で、お互いの鼻見をして折詰弁当を開いて



野田の天神さま

遊んだのである。当時の雛節句は信仰心のこもった心あたたかいもので大人も子供も和氣藹々と楽しみまことに美しい行事であった。

花まつり

毎年卯月（四月）八日はお釈迦さんのご誕生日で仏教では、誕生仏を甘茶で灌浴しお祝いする慣わしになつてゐる。これを花まつりと言う。

花まつりの日には、母から一銭か二銭のお賽銭と五合くらい（約一リットル）の瓶をもらいお寺へ甘茶をいただきに走る。昔は、甘い物が不自由で黒紫に熟した桑の実や赤く色どる山苺を競って食べた覚えがある程で、甘茶と言えば遠くても喜んでお使いした。

お寺の本堂にある広縁に大きな盥のような桶に半分くらいの甘茶を入れ、その中に三十センチ角大の「花御堂」を造営し浮かしていた。花御堂はその名のとおりレンゲ、菜の花などの野の花できれいに飾り、その中央に小さな黒い裸の人形が安置されていた。これが



昭和50年 安国寺の花まつり

有名な誕生仏だと知ったのは、はるか後年のことで子供心には不審でならなかった。

寺の和尚さんが法衣をつけて、何かお経を唱えては備え付けの柄杓で誕生仏の頭から何回となく甘茶をかけていた。子供らが見えるとお経を止めて、お前さんは何処の家の子供かとか、兄弟は何人かと話しかけ、拝むのはこのようにするものだと言って、人形に甘茶

をかけ手を合わせ「アン」と拝む所作を教えてくれた。言われるとおり素直に真似したらよくできたと褒めてくれ瓶に一杯の甘茶を入れてくれたし、その場で飲ませてくれた。別段有難いとも思わなかったし、あこがれていた程に美味とも感じなかった。甘味が強過ぎるせいだろう。

このように甘茶の布施と供養によって、童子童女を通じて在家仏法のつながりを、一層堅く濃くしていったものである。

また、今日われわれがお墓参りをした時に、墓碑の頭からお水を流す風習もここから生まれたもので地下に眠る霊の極楽浄土への成仏を祈願するためと受け止めている。

とにかく、頂いて帰った甘茶は家族全員が分けて飲み、余った分は家の周りに撒いたり、「甘茶」とかただ「茶」と書いて戸口の柱にしかも逆さに張りつけておいたりした。これは、夏になっても悪病や毒虫（へびやむかで）に襲われないとの呪いであった。

甘茶はユキノシダ科に属し、信州（長野県）あたり

に多く野生するものを採取し陰干し、これを煎じる。薬効としては駆虫剤、糖尿病に利用されるが、主として砂糖がわりの甘味料として古くから活用された。

金こんびらさん

陰曆の三月十日が縁日である。境内には色ちがいの幟のぼりが立てられている。参道の両側には色々な店が並び客を呼ぶ声や子供が笛を吹く音で賑やかである。

境内の片すみの黒山の人だかりは、四国一の独楽こままわしが大中小の独楽をまわして刀の刃渡りや自分の後ろ肩をまわして手に取り、又空中へ投げ上げて受け取りまわす芸を見せてから自分の腕をうすく切って血を出し、がまの油を塗って血止めをして、客に油を売るのである。そのほかにのぞいて見る紙芝居式の見せ物があった。大きな箱の中に、「浪子と武夫」の紙絵が入れてあり直径十センチメートルくらいの丸いのぞき窓が四、五個並べてある。二銭出すと見せるのである。舞台の両はしにいる男と女が竹のむちで板を叩いて面



まつりでにぎわう金びらさん

白いふしで歌をうたって繰り糸で絵を時々替える。歌の文句は、「ほととぎす 三府の一の東京で、波にただようますらをがはかない恋にさまよいし、父は陸軍中将で片岡子爵の令嬢でその名は片岡浪子さん、海軍少尉の男爵の川島武夫の妻となる……」以上のような歌を聞きながら大人も子供も見たのであった。当時は相撲もちが盛んで近郷の力士が集まって今の公民館のある所で毎年相撲を取っていた。青年の飛び入りもあった。松山の方面からお講参りの人も多く来て盛大な縁日であった。参拝客は一杯気げんで大きなお札おたを斜めに

背負うて、見せ物をひやかしたりしていた。

金ぴらさんは、伊予三山の中の一寺で有名である。宝物の中に天狗の爪と馬の角があるという。

麦うらし

春も春の行なわの四月中旬ともなれば、麦作最後の手入れ「止め谷」もすませ、後は五月末の刈り取りを待つばかり。この一か月余りが農閑期で、人呼んで「麦うらし」といい、農家の一番楽しい時期である。

五月晴れの空は底抜けに明るく、吹く風は肌に心地よい。互い気心の合った若い主婦や娘は、三々五々語り合いながらの石手寺詣でに出かける。

久米駅で汽車を捨てて日尾八幡さんから畑寺の百間土手、東野の久松家の孟宗の竹籜を通り抜ければ霊場五十一番、熊野山石手寺の門前につく。清流石手川で心身を清め、弘法大師お茶堂で手を合わせ、報謝と祈念をする。堂内は古びて暗く灯明と香煙で一寸異様に感じられた。両手を打って拜んで大人達に笑われた

た記憶がある。

この頃が丁度昼時で、お茶の接待を受けて昼食となるが、メニューは、寿司・うどんなどで今も変わらないう。お土産として「やき餅」を買って帰るのを常とした。中でも篤信の人は、後方の愛宕山にある四国八十八か所を巡拝し護摩堂でお通夜し、翌日帰ることもあった。

又、道後に廻りゆっくり温泉に浸って松山に出る人もいた。道後の湯は女の肌を滑らかに美しくすると信じられていたからで、湯の底が洗砂であったことも忘れられない。お灸の「モグサ」がよく効くといわれて買って帰る人も多かった。

若い男達は、遠く讃岐の金毘羅詣でに出かけた。金毘羅大権現大門前まで二十八里(一一〇キロ)三泊四日の行程は、元気な者でも大変だった。

又、若い嫁はこの日を待ちかねてわずかの土産を風呂敷包みに里帰りをする。骨休みと孫の顔みせともで足元軽く気も軽い。父母への土産物を忘れない。

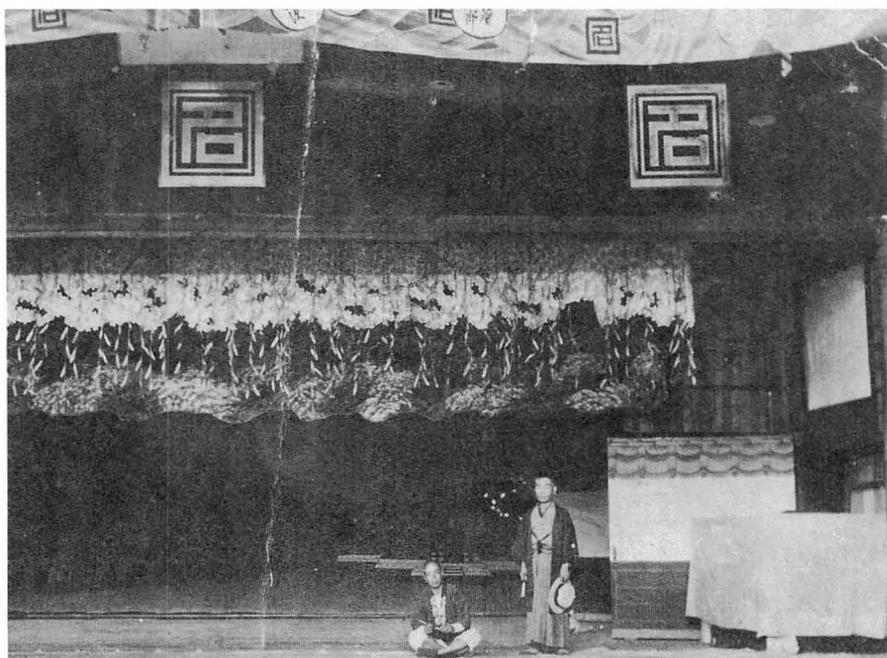
麦うらし行事の代表は何といっても人形芝居だが、

木偶芝居といった方が昔話にふさわしい。

阿波の国から市村源之丞と六之丞が競って来演した。又、三津浜から素人、伊予源之丞一座も割り込んで来た。日露戦争後の繁栄で宮東区に常設館として二階建ての豪華な「名越座」が誕生した。「常小屋」とも呼んで大衆の人気を集めていた。まだ電灯は点っていない。百刃ローソクや石油ランプ、ガス灯で照明をとる。電灯がついたのははるかに下って大正の中頃だった。

芝居が五、六日も開演すると小屋の借り賃が高つくので急造の仮設小屋を建てたが雨が長続きすると請元は悲鳴をあげた。

一座が来演すると幟旗をかつぎ、太鼓を鳴らしながら「外題触れ」が村中はもちろん遠くお隣の横河原・田窪あたりまで宣伝して廻った。観劇料とか入場料とはいわず「木戸銭」といって十銭くらいだったように思う。しかし場内には「マス席」といって五尺（一・五メートル）角くらいの枠組の席があって四人が座れた。ここに座るには五十銭くらい余分に払わなければならぬ。今日の指定席で、その他の自由席・一般



明治・大正・昭和と住民のいこいの場となった常設館名越座(明治40年開設)

席は「オイコミ」と言っていた。

この頃の女の内職であった伊予紵の機織賃が、一反

(二丈八尺。約八・五メートル)十銭で少し手間のかかる「つなぎ」というのが十五銭くらいであった。

木偶芝居見物は殆んど昼間で、家からの料理は塗りの重箱に詰められ、男は酒を瓢箪に、女は髪、着物を着飾っていそいそと出かけた。

演しものは「太閤記十段目尼が崎の段」とか、お里沢市の夫婦愛、お俊伝兵衛の「猿まわし」などで今日と余り変わりはないが、人形も舞台も大型でスケールが大きく生きていた。

興が乗れば酒も進み、顔見知りも大勢来ているのでマス席を越えての談笑で、舞台に背を向ける者もいる程万事が大らかにノンビリしていた。

浄瑠璃の分からない子供達は退屈していたが、一番人気のあったのは「八段がえし」といって三味、太鼓の鳴物に拍子木ではずみをつけてバツタンバツタンと奥御殿の様式をしかも遠近法の手練手管で変化させて見せるのである。胸を躍らせ夢中で見入った。

お茶娘がいてサービスにあいつとめる。

芝居は木偶だけではない。壮士芝居は現代劇で、浪

曲芝居はチョンガリ芝居とも言っていた。浪花節に合わせて左官が壁を塗る格好でとても調子に乗っていた。主に鬻物を演じた。

新派の恋愛ものは活動写真も取り入れ実演のむずかしい場面も、恰も現場を見ているような錯覚を起こさせ興奮させた。連鎖劇のことである。

今日滅多に見られぬ中央の一流歌舞伎芝居も来たし各流派の浪曲家も来演している。素人浄瑠璃大会は、今日の「のど自慢大会」に当たるだろうか。

娯楽の殿堂、名越座が賑い、女の内職で得た「針箱銭」まで浚って行く始末であったという。

昭和の初め頃、後とも先とも只一回、福岡県あたりから女相撲が舞い込んだ。凄く大型の女力士がいて、素人の飛び入りを歓迎していたが、実際の飛び入り参加は少なく、主に踊りを見せていたようだった。

かくて晩春の長い日も終り、やがて猫の手もほしい農繁期にはいつてゆく。



娯楽の少なかった当時、青年芝居もよく行われた
昭和初期の写真である

5 月



苗代なわしろふみ

苗代なわしろ作りは、空播からまき、練播ねまきなどの方法で行われていたが、農家にとっては最も大切な行事の一つであった。家族は総出で朝早くからこれに従事した。水の関係で同じ部落でも二、三日くらいの違いはあったが、大体八十八夜を中心に行ったのである。苗代作りのことを「苗代を踏む」といった。

でき上がったら水口みなぐちのところ土を盛って、「おさんばいさん」を祀った。柁を一枚立て、お正月の神祭りに使ったお餅と柿と三番叟さんのくれた小さなお幣を立て、その上へさん俵の屋根を作って竹を刺して傘かさをした。

この苗代踏みにまつわる話の一つ。

昔、百姓達が苗代作りをしていると、悪い魔王がやって来た。この魔王はかねてから勤勉な百姓のすることが気に入らず、何とかして百姓の根を断ってこの国を自分一人のものにしようと考えていた。そして、この時とばかり、百姓達に苗代に粃もみを播まくのは必ず粃種いを炒いって焼米にして播まくようにと帰った。

百姓達は粃を炒いったのでは芽が出ないことを知っていたので、いろいろと相談をして、生のまま播まいて魔王が来て苗代を見たらいけないので、粃殻もみがらを焼いて黒くしたのを粃の上に振りかけておいた。

水口へは土を盛り上げ、その上に道端みちばたの苔こけを一鍬取ひとくわって乗せ、魔王よりお正月の神様の方が強いだろうとお正月にお供えした鏡餅ひしぎれの一片と干柿ほしがき、たづくり、お

米、三番叟さんからいただいたお幣を立て、その周囲を美男かずらで輪を作つて藁で傘をこしらえて、その傘の真中へ竹を突き刺した。このか

おさんばいさんの図



ずらの輪は魔王の眼玉だと仮定してつき刺したという。そして播き残りの粃は焼米にしておき、魔王が来た時に「このように粃種は炒つて播きました」と言つてみせた。魔王は眼を刺されているので見分けができなかつたという。一説によると、美男かずらは大変丈夫なかつらで、このかずらで輪を作るのは、苗が立派にできるまで苗代から稲作りの神様が出ないように輪で神様を囲つたのだとも言われている。秋の稔りに重大な苗が立派にできるよう真剣に祈願していた。その日は泥まみれになつても、風呂には決して入らず、手足を水で洗うだけでしたという。

端午の節句

五月五日は端午の節句。別名御霊の節句ともいう。

三月の節句が女の子のものであるのに対し、五月は男の子の節句である。節句が近づくとまず今年は親類中に子供が生まれていたかどうかを考え、女の子には雛人形を贈り、男の子には鯉幟か吹流しを、又、武者幟や鎧、かぶとの床飾りを嫁の実家から贈る習慣がある。里親としては晴ればれとした祝い品である。

五月晴の青い空に矢車が音をたて、鯉幟や吹流しが大空に悠々と泳ぐ勇姿は、男子の未来を示すような躍動感を覚え「鯉幟ここにも日本男児あり」と叫びたくなる程である。子を持つ親として誠に嬉しい贈り物である。贈呈者に対してはお招きをし、お酒やら色々なご馳走をしてお礼を申し上げ、親類一同相集り子供の成長を祝福するのである。

五月四日の夕方には、茅、蓬、菖蒲、梅檀の木を束ねて屋根の上に投げたものである。菖蒲で鉢巻きした

り兜かぶとを折って頭にかぶり得意がる子供もいた。又、菖蒲と蓬を風呂に入れて沸わかした湯にはいると若草の香りが鼻をついて新鮮な気分となるのである。端午の節句には必ず柏餅や団子をつくり、神様にお供えして子供の成長を祈った。柏餅は餅米と粳米うるちまいの半々くらいを混ぜ合わせた粉で作り、塩餡あんと黒砂糖餡でつくったもので当時は非常に美味であったと思う。

井手掃除と水利

水の恵みの偉大さ、その水の管理と水路の維持運営について記してみたいと思う。

現在川内町には七区の土地改良区がある。北方、南方、前松、奥松、吉久、保和ほわ、揚畑田あがりはただ、別に道後平野の水利利用者の互恵組合一ヶ谷とがある。昭和二十五年以前には、七つの改良区は水利組合という名称であった。各組合には組合長、副組合長、監事、理事の役員がいて運営され、農業用水に重点を置いていた。そして、運営資金としては、賦課金ふかきん一反歩いつたんぶ当たり四千円



井手掃除はみんなの手で

から最低三百円の組合もあるので、井手の出役でやくに対する賃金の支払いも大きくひらいていた。また組合のない地区では井手、井手持ちが個人管理のような方法で運営されていた。災害の時には県営、町営などの補助工事の方法もあった。

農繁期前になると、水利組合の役員が主となり、井手惣代と相計り差しつかえない日を選んで井手掃除日を定める。その日は、指定の時刻に指定の場所へ集合し相談の上、色々に分業をする。雑草を刈る者、泥土どろつちをさらえる者、捨てる者など近所となりの人々と汗を流しての共同作業をする。人家密集の土地では非農家も一緒に井手掃除をするところも多いようである。近所の者が一緒に仕事をしながら話し合う。井手掃除ならではの風景である。仕事が終わると持参した米二合半に、いりこ油揚げ等を入れた炊き込み飯を作って食べる。この夕食を井手祝いといったものである。農家の者はみんなが今年の豊作を祈りながら六十年もつづけている井手掃除である。

6 月 田 植 え



五月も下旬に入るとギラギラする太陽に麦が急に熟れてくる。麦秋から田植え用具の整備、くろ刈り等農家の気分はイライラせいでくる。

刈り取った跡の高畝の表土と根土の天地打ち返し

に荒鋤きから取りかかる。溝には麦藁や牛駄屋のしき藁を入れたり畝の両側に植えてある大豆の緑肥を鋤き込む。米作りはまず土づくりからと自覚していたし、雑草の繁りは農家の恥としていた頃である。牛が田に入ると間にあわないので女子供が前日までにすませておく。荒鋤きは空鋤きといって水は引いてない。能率が悪く疲れ易いからで、鋤き終わり次第水口を開いて水をなみなみと入れる。

田植えにかかる二、三日前に新畝を三つに割り拡げることが、「これを「むくち」という。さらに田植えの当日「むくちかき」をかけて水面を均平化すると共に浮遊物を一掃する。この一連の田鋤賃は素人賃金で一円であった。当時四円で請け負う人もいた。

この耕耘は総て飼牛に頼るが、牛使いも要領があつて機嫌の悪いときは簡単には動かない。第一に牛に人間を見る観察力があつて、これは甘い人じゃなと見たらビクともしない。雄の黒牛は「コッテ牛」といって使いにくいので去勢したのを使う。温和で良く働くのは備後（岡山県）牛が最高で、伊予では三崎牛の評判

がよかった。朝鮮から「アベ牛」も移入していた。

畔ぬりがまた大変で、高岸の所は今も畔をつけているらしいが、水が洩れないように周囲の畔を厚くする。一応所要の土を引き寄せ、練り混ぜて畔を築く。あぜ塗り用の特殊の鍬を使つての重労働で大抵男の役目とした。女は適当の間隔で大豆または小豆をまきモミガラで覆い土でおさえた。

苗取りさんは田植えの前日からかからねば間に合わない。低い木製の腰掛けに棧俵を敷物がわりにかけ、両手で五、六本つつ丁寧に引き上げるようにぬきとり、バサバサと水中で泥を洗い落して束にする。

締める紐は稲藁で、しかも正月に訪れる人形三番叟で豊年を祈念して拝んでもらつたものを使うのを例とした。当日は竹で太目に編んだ稲籠で水田に苗を運び、使い易いように田一帯に撒いた。

苗取り作業は辛気な仕事で、日暮れには腰が痛み太股が張り、重労働として賃金も割り増しされていた。さて、いよいよ当日は器用な人が定規繩を張る。

定規植えは、明治の初めから昭和三十年代まで久し



昭和二十五年頃 なえとり風景

一本の竿に早乙女さんが四、五人つつ並び、両端の二人が気脈を合わせて引き上げ後下りに苗をさしてゆく。水田の中では話し声がよく通る。男ののど自慢はこの時と大声で歌う。田植えは殆んど部落が一緒になるので沖田は戦場のように忙しいが、どこかにのどかさが見られた。

早乙女さんの服装だが、明治、大正の頃はモンペという便利なものはまだできていず、普通の着物に襷が

けし、二の腕までの長い手負いをつけ下肢は腰の廻りまで端折って腰で締める。

娘さんや若嫁さんは赤地のものを、中年は浴衣地の花模様、年配者は伊予緋の腰下をつけた。



昭和4年ごろ 川上小学校生徒による田植え (川上小学校蔵)

ふくらはぎも脚絆でまき、頭は手拭いを姉さんかぶりに経木の夏帽をかぶっていた。

男は天竺木綿の上下で足首を紐で結んでいた。

田植えには当然雨が降る。降れば合羽のない頃だから蓑笠をつける。

笠は「タクラバチ」とも言っ、割り竹を芯にして荀の皮とスゲ草を重ねて編み、ミノはスゲと藁、棕櫚で編み合せて武具のように肩袖付けにした。糸は棕櫚と稲の穂先にあるスベを混ぜ合わせていた。上物は南洋産の麻糸を使っていた。

スゲ草は主に上浮穴郡から取り寄せていたが、製作は奥松瀬川の手内職として行われ、特産物として重宝がられた。

食事についてもふれておこう。

主婦は少しでも田に出て手伝わねばならない。

男より一足早く帰って仕度するので自然と粗末になるのは止むを得ない。他人が来ている時はそうはいかないので多少の魚類を買ったが、大抵は松前の「おたた」さんが置いていった「ニボシ」、塩鯖、油揚げ類

で大根の突出しや糸昆布、二度芋の煮物で賄う。

主食は二度炊きする丸麦で、米がほんの少々入っていた。麦飯の黒こげに蠅が黒豆のようにたかっていた。それでも空腹に飛び込んでいくようで満足だった。精麦機のお蔭でシャギ麦が食膳に上ったのはもつと時代が下ってからのことである。

当時の近隣相互扶助は緊密で、多忙の時の手間替を「いい」という。「おこうろく」という、ただ奉仕の習わしもあった。

田植えには気温、季節を重んじる。この季節をはずしては稲は十分に育たない。

井内、河之内の奥地では「節植え」といつて六月七日（芒種の節）には既に終わり、夏至に当たる六月二十二日には「中植」といい平坦地で行い、遅いものは七月二日の半夏生田として最後になる。

奥地の元気な人は半夏生田の残る下通り（今出、余土方面）に順次出稼ぎに出かける。苗取りさんや牛を連れての大掛りなものもいた。約十日余りの賃金は女の懐を潤した。帰りには道後の湯につかったり土産の伊

予絣や浴衣などを買うのを楽しみとした。

夏の長い日を朝から晩まで休み無しの重労働に耐えあまつさえ栄養不足をかこちながらの二重苦で、田上に病人が続出したのもこの頃の特徴であった。少々具合の悪い者も多忙のためおさえにおさえていたためでもあろう。本当に昔の人は死に物狂いによく働いた。

田植え歌

定規を使って正条植えをするまでは田植えは、四人から六人くらいが一列に並んで、後ろ下りに植えて行った。植並は縦を通していても横はジグザグであった。定規植えに替わった頃、田植えは裁縫と共に嫁入前の娘にとって重要な習い事であったから、例え良家の娘でも田植えの日には「よろしくお願いします」と母親が田植えの長（指導者）になる人に懇に頼み、長がきつく言っても腹をたてたりはしなかった。

長達が定規の両端を持ち、習い初めの者を中ほどにし苗を植えた。大勢で植えるとき、中植えの慣れぬ娘

が自分の受け持ちのところを両隣りの人に植えられてしまふのを「お囲い」といって最大の恥辱ちじよくとした。田植えは田植え歌を歌いながら進められた。初めての者は長の歌おきう調子を覚えるのと植え方を覚えるのことで必死であった。

田植えのコツは右手で植える間に、その家の都合で苗を二本なり五本なりにいわれている本数を左手でひねり出すところにあつた。言われた本数の上下一本の多い少ないは許されていたが、長おきになると十株の内六七株は言われた通りの本数を植えていた。

田植え歌は基本になる歌が、午前中と昼中ひるなかとお茶（午後三時ごろ）からと三通りにわかれていた。

午前中の唄は

おさんばいさんはあらたなる神じやのう

馬から降りて筭かを取れとのう

というのであり、昼中ひるなかは

山田の稲は畔あぜにもたれかかる

娘十七、八可愛い殿御よめごにもたれかかる

と歌う。そしてお茶時からは

日は暮れぐれに駒こまをどこへつないだ

うね谷越えてとうな草につないだ

というのであつた。もちろんその他の歌詞も中へはさんだが、朝昼夕の歌はそれぞれにわけてその時どきに歌つた。節ふしに合わせてそして歌の切れ目にもその調子でチヨッピン チヨッピン チヨッピン チヨッピンと植えて行つた。

長おきは、昼からあるいはお茶からその日の予定と、それまでの進み具合を考え合せて、歌の調子をかえた。一人六畝せ（六アール）が田植えの標準であつたが、ちよつと歌の調子を速はやめることで一畝（一アール）くらいは余分に植えることができ、反対にゆっくり歌つて終了時を日暮れに合わすこともできた。

田 休 み

自家所有の田を耕し、春田は空鋤からずきにし、麦田は水を引き入れて荒地鋤きにした。そして「ムク地鋤き」をして馬鋤まぐわかきで地面を平らにし、稲の苗を植える。

この作業の終りの慰労の日を「田休み」という。

各地の水利組合では、全部終わる日を見定めて公示するのである。「定、何月何日、田休み、春田一反歩当たり四円、麦田二円五十銭、早乙女賃一円五十銭」というように定められるのである。これを「村定め」といったのである。村定めとは並通りの賃金を意味しているのである。支払い金額は大正の末期かと思われる。

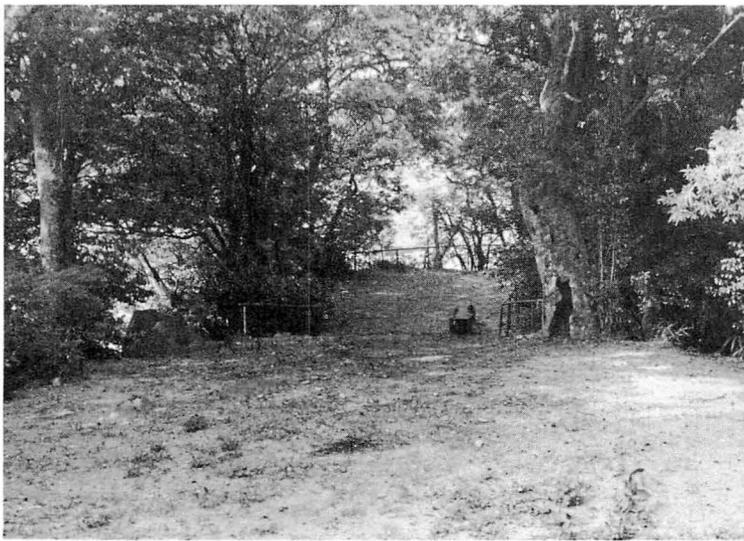
何日は田休みだと前から心待ちにしている程田休みは待たれるもので、前日から柏の葉を取ったり米の粉や小麦の粉ひき等の準備に忙しい。

さて当日となると、主婦は早朝から柏餅をつくる。又、田植え賃の支払いに行く。お礼を申し述べて村定めより多額に支払うのである。

でき上がったご馳走を家内中が打ちそろっていただく。今日ばかりは田休みだと昼寝をしたり、足をのばして、疲れた体を休めるのである。

雨あま 乞ご い

幾日も雨が降らず、年によると二十日以上もひでりが続くと、農作物は枯れかかることがある。その時雨



雨乞い祈願が行われた雨滝神社跡

乞いの神事を行う。お旅所では雨下駄をはき番傘を広げさせて鳥居を潜ることになつていた。元気な人の内から代表を二名選び、高知と愛媛の県境の大野ヶ



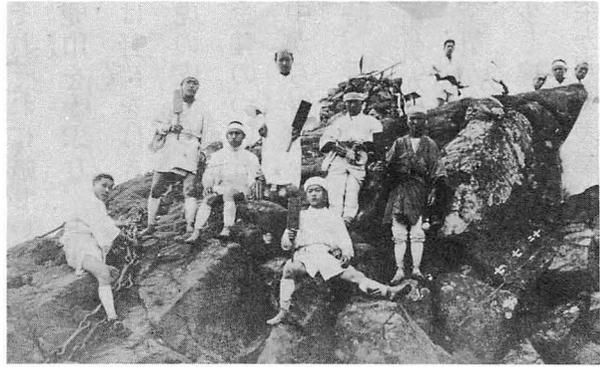
昭和9年大干ばつ記念北方水利組合役員 1町作付して10俵もとれなかった家もあるという。

原の竜神様にお願いで御神水を戴きに行った。これも自転車で行き一泊しての旅であった。帰りは休んだけ御利益がないので、御神水を入れた一升びんを背負って自転車を踏み通して帰ったという。組中で待っている者は帰る時間があらかたわかったので、村境まで迎えに行き、帰ると一緒に表川の一の堰、二の堰へ御神水を流しに行って御祈念をしたものであった。また、塩が森へ登って火を焚いたりもした。法師山でも法師権現様に火を焚き御祈念をした。

特別有名な雨乞いとして、松前の「おたたさん」によるものがある。潮水やお祝いの鏡餅その外お供えの品々を各自の御用びつに納め、自分の頭にのせて雨乞い幟を先頭に長い行列を作り「雨を下さい竜神さん」とくり返しながら途中で川上の大宮神社や鎌倉堂で休み、湯茶の接待を受け又、はげまされて雨滝さんへ「お面うつし」の神事に来たのである。帰りは拝殿でお神酒やお湯茶の接待を受け、長い道中の労をねぎらわれた。それぞれの土地でもお寺やお宮で一生懸命に降雨の御祈念をしたのである。

7 月

石 鎚 さん



(大正9年撮影)

お山開きは、新暦七月一日から十日までの十日間で、四国はもちろん全国からの信徒さんが集まって流石の長い山道も蟻の列のように切れ目がない。

本尊は、石土毘古尊とされてはいるが、通称蔵王権現で知・仁・勇の三体の不動尊で通っている。

この山岳信仰はその昔、役の行者が開き、かつては

弘法大師も参籠し真言密教の混合宗教となつて発展した。

それよりも一、九八一メートルの霊峰は、山そのものが神霊として崇められ、昭和の初めまで女人禁制とされてきた。

事実、朝夕に拝する石鎚の秀峰は、美しいと言うよりも自然と頭の下がる神々しささえ覚える。

昔はこの山に天狗が住んでいと俗人から恐れられていた。天狗とはその由来を仏教に求め、あから顔に特に鼻が高く身には羽根をつけ、隠見自在に振る舞い、非常な怪力と強烈な感情を持つ嵐のような護神仏とされていて、人間に非道、不遜な言動があれば立ちどころに吹き飛ばされると信じられていた。

里人の石鎚さん信仰は、日常生活の中にも溶け込んで毎月の石鎚講となり、朝夕の灯明灯籠となつて今も各地に残っている。

このお山を極めるにはそれなりの掙があつて、只漫然とは登れない。大抵十人から二十人くらいの連中をつくり、揃いの白衣を身にまとい、手甲、脚絆をつけ

赤い丸の棹内に「石」の朱印が押された真新しい日本手拭の鉢巻き姿だった。初参りの者は必ず白の杖を持っていた。足下は、草鞋ばきで地下足袋の出回ったのはずつと後のことである。

一連の中には必ず今でいうリーダー即ち先達がいて何かと指図をしてくれた。新参者を新客と言ひ、大先達まで六段の階級があつた。その人の登山回数や修業方法で格付けが決まり、それぞれに厳しい戒律があつた。山伏や大先達は頭に兜巾をかぶり、上体には鈴懸という特殊な服装に、下は野袴をはき、首からは大きな念珠を下げる。腰には虎の皮でつくつた「尻すけ」をかける。手には突先に金輪のついた六根清浄の金剛杖を持っていた。又、背中から肩にかけて「法螺貝」も離さない。それを出発時、祈念の最中や連中の疲れが目立つ時に朗々と吹くと勇氣が倍加した。岩壁に立つて法螺の音聞けばお山の空氣が身にしみる。

お山に登る道は、今と少し違ふので当時の模様を話すとしてしよう。まず小松・西条からを表参道と呼び、久万・面河からを裏参道という。

川内を朝五時に発ち、桜三里の鞍瀬溪谷を落合から楠窪に入る。四国六十番札所、横峰寺に参詣し、弘法大師が遥拝されたという所から見れば石鎚山も指呼の間に迫る。そこから一応加茂川上流河口橋まで降り、疲れた足でまた黒川部落まで急坂をよじ登る。上り下りの道行く人もマナーがあつて、「お上りさん」「お下りさん」といたわりと励ましの言葉をかけ合つた。黒川で一泊するが水浴の岩清水は冷たいので「黒川の一度懲」と広く言いふらされた。翌朝は薄暗いうちに発つて成就社へ、更に頂上へと一気に駆け登る。それでも二時間はかかる。頂上近くに鎖こぎの所が三か所あつて、手と足に全霊を注がねば危ない。老人も若者も真剣味に溢れていた。少しでも甘くみたり油断すれば深い谷に落ちる。これを世間の人は天狗に跳ね飛ばされたと言ふ。頂上の三体のお不動さんにちよつとでも触れればご利益があるというので皆んなさわつた。

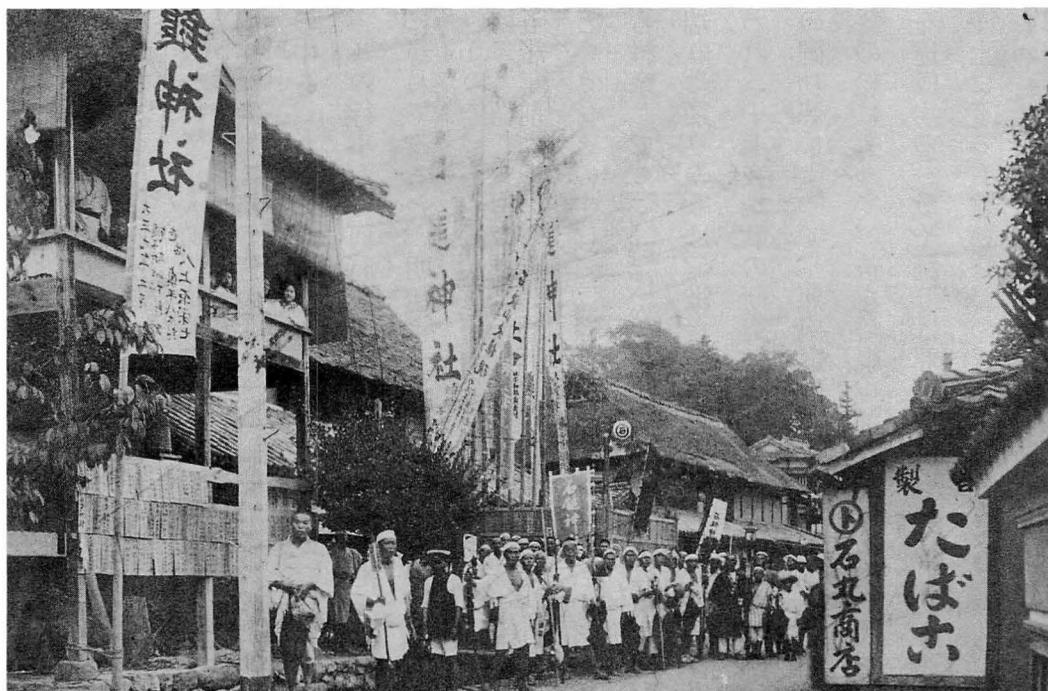
頂上は霧が下から吹き上げてきて平野は滅多に見えない。それでも少しのすき間から西方を見れば、川上神社は麓の山に隠れて見えないが、揚神社の森ははつき

り目に映る。重信川は蜿蜒と内海に注ぎ、伊予鉄列車は長虫のように走っている。

「ばか覗き」を後から足をおさえてもらいながら腹這いになって覗いて身震いした。境内は狭いので長居はできない。帰りは裏参道を小走りに降りるが「五十町里」といわれるように遠い。それでも下りは楽に面の関門まで辿りついた。そこからは平坦で若山、七鳥を経て渋草部落につき二泊目する。最後の日は黒森峠を越さねばならない。この頃になると流石に足が重い「ナンマイダンボー」の独特の節廻しで唱えると何故か勇気が湧いてきた。意味は今に判らないが、おそろく仏語からきたものであろう。二泊三日の修練行であった。

国鉄予讃線が開通するまでの川上宿場は石鎚さん参詣の表街道として南予、中国九州からの上り下り客の一泊地に当たり、川上中の町にあった米田屋・大頭屋の旅籠は宵着き、朝発ちで大賑わいだった。

町の中央を流れる川は水浴場に改設され、囲いの板垣には遠来の常連客の氏名を麗々しく記入し歓迎した。



中の町米田屋は石鎚登山客の宿としてにぎわっていた (昭和初期撮影)

石鎚権現の幟が幾流も林立した。

到着すればその合図に、又出発時には別れの法螺貝を高らかに鳴らして互いにその技を競った。

囲いの中では屈強な男が呪文を唱えて身を浄めていた。帰りの客の中には、見物に来ている子供達に土産物のニツケを少しづつ分け与えて善根を施す者もいた。

松皮田峠を越した土谷部落にも立派な門構えの新屋茶七、本屋の屋号を持つ宿屋があつて共に栄えていた。何流かの幟旗も立てていた。

今やお山にはバスとロープウエーで登り、石鎚参りは信仰とは程遠い僅か一日の観光行楽に変貌した。しかし、あまり甘くみると禍い、その身に及ぶことを忘れてはならない。

医王寺入波の話

医王寺の夏祭りは、旧六月十七日入船の行事である。

御本尊薬師如来様を船に奉戴してお寺より約三百メートルはなれた南の渡船坊からお寺までの渡御、い

わゆる入船である。船は長さ三メートル、幅一メートルで、周囲に金銀の色紙をはりめぐらして飾り、更に小さな赤い提灯を吊し、この船を若者数人が、船底からかついで、大勢の稚児さんが美しい服装で船を引き出す。太鼓・笛の音楽で、沿道両側の多数のボンボリの中を、お寺に渡御する。美しく華やかな行事である。

この行事が、何時の頃から始められたものか、古老に尋ねてみると、明治より遙かに古いものであろうというので、まずお寺の歴史をみると、神亀二年（千二五十年前）の頃お寺の周囲に、六十二の坊寺があつたという。その中に、「渡船坊、通船坊」の名のある事から推察して、この時代からの事であろうと考えられる。端歌や踊りの歌は、鎌倉、室町以来の事であろうといわれ（十七夜端歌の研究誌より）寺の御本尊薬師如来の御功德によって、悪病退散、五穀豊饒、踊り即ち弘誓の船によって、苦を離脱、踊る事によって即身成仏を達成する。歌や踊りは邪念をはらい、このまま安楽浄土に至る有難い修養の近道であろうと伝えられる。約八百年前から伝承されたものであろうといわれている。

る。

入波の歌

みなと みなとに行き暮れて

おほひの浪のよせくるや

ぜひも浪風立たぬまに

いざやこの船こぎ入るる

と歌ってから仁王門より入る。

庭狩は、小倉の袴に六尺の杖をつき、声張りあげて

まず、お寺の建築物や庭を一つ一つ誉める。その一節

一節毎に、「参候の役」はこれも袴姿で「参候」と音調

長く引いて唱える。この問答的なやりとりが十数回つ



子供心にもこわかった提婆

づく。その後提婆が長い杖を振り立てて声張りあげ、
「東西東西今晚この所にて踊りの企てであると承る。か
ような所には、色々な者がそいたがる。そのおさえの



五穀豊饒・悪疫退散を祈り踊る医王寺の夜はふける (昭和50年頃)

ために、某（まがし）がつきましてござる。」と、長い杖をジャンジャンつきながら、踊りの周囲をくるくる廻る。いよ踊りは最高潮に達し、東西南北おだやかに、五穀豊饒を祈り、音楽にあわせ踊る。「極楽の渡しの船に打ち乗りて、弥陀（みだ）の浄土へ今ぞ赴く。弥陀給え、仏になるも眼の前ぞ、願えば我も即身成仏、音楽の踊りは風情の船なれば、弥陀の浄土へつなぎとり給う。有難やハイヤ 有難や、風情の船に打ち乗りて、弥陀の浄土へ迎えとり給う。」華やかであり厳肅であり、老若男女の参拝者多く賑やかな夏祭りであった。

土用ど入いり

土用というのは、太陰曆にある雑節の一つで年に四回ある。立夏・立秋・立冬・立春の約十八日間のことである。

太陽の黄経がそれぞれ二十七度・百十七度・二百七度・二百九十七度になった時が土用入りの時刻である。普通は、夏の土用即ち七月二十頃を土用の入りという。

一年中で最も暑さが厳しく、体力も弱る時期であるため、夏負けせぬようにと、お正月に作ったはがため、あられ等を食べる地方もある。又、土用の丑（うし）の日には鰻・泥鰌（どじろ）などを食べ栄養をとり、健康づくりを努めたのである。

鰻はかば焼きや鰻飯などにし、泥鰌（どじろ）は油や酒で炒め、つつき砕き、これにそうめん、なす、里芋（さと芋）、豆腐などを入れ泥鰌汁にして食べる。農村では特にご馳走の一つであった。今は養殖のものが多くが昔は泥鰌はじょうれんで小川へすくに行き（どじょうふみともいう）、鰻は短い竿（さお）でみみずやどじょうのえきで川の岸や大きな石の下などへさし入れて釣った。又、もじ（もじ）といって竹で編んだ筒で一度内に入ると出られぬように作ったものに、たにしや泥鰌を餌（えさ）に入れて、夕方川の岸根（きね）に下流に向け口（くち）だけ出しうずめておき、翌朝これを上げに行くこと、二本の鰻が入っていて、見るより先にその重（おも）きで胸をときめかせた子供時代の経験は、多くの人々にとつてなつかしい思い出である。

昔は、牛は百姓の宝であったから牛肉を食わなかつ

たし、又、四つ足の動物の肉も嫌って食べなかつたために動物性の蛋白が不足していたものと思われる。夏は淡白な食物をとりがちなのでこれを補うため、川魚でも特に脂の多い鰻・泥鰌を選んだのも昔の人の知恵であつたと思われる。

虫 祈 禱

土用の入りより三日目に虫祈禱が行われる。

当日、戸主は、全員神社や寺又は庵などに集まり、大きな太鼓をドンドンドン、ドンドンドンと叩きその太鼓の音に合わせて、「ナンマイダー、ナンマイダー、稲の虫は河原へ行け、河原の虫は目むいだ、ホーイ、ホーイ」と大声で唱えながら虫祈禱を行った。その後行列をつくり表川へ行き、堤防の上で一段と声を張り上げ虫送りをするのである。それがすむともとの場所に戻り黄な粉でまぶしたおむすびときゅうりもみなどで食事をした。子供達も学校より帰り次第参加して、この黄な粉むすびを貰うのが楽しみの一つであつた。あとは酒

をくみ交しながら稲作の話しから四方山話に花を咲かせ楽しくこの行事を終るのである。

御祈禱したお札は竹にはさんで田毎の水口に立てて

虫除けのお守りにした。

地区によっては太鼓と鉦を叩きながら各家を廻ったり田の細道を廻ったりする。又、百万遍の念仏を唱え、大きな珠数を繰りながら虫祈禱をする所もある。最後は河原へ虫送りをするが各地区により、西の重信川や表川二の堰、滝の下に虫を送り流すのである。

昔は害虫に対してよい防除薬がなく、ほとほと手をやいていたことが想像される。

虫除けのため山之内の奥の福見山へ参拝し、お札やお火を貰って帰る者も多かったが、山道ののぼり道が一



念仏を唱えながら珠数をたぐり、虫を送る

里以上もあるため、朝早く出発し涼しい間に山道をのぼろうと数名さそい合わせて行ったものである。寺の境内では相撲すもうなどもあり、又、そこは松山市や瀬戸内海が一望に眺められるよい場所である。周桑郡の大気味神社やさん又は大三島の大山祇神社おやまづみに参拝し、虫除けのお札とお火（神社の拜殿のお光りを火繩に移す）を頂いて帰り、田毎こどもに振って廻り、その時貰ったお札も田毎に立てて虫除けとする者も多かった。

しば肥刈るより

大三島へ行け

という言葉もある。昔は現在のような化学肥料は無く、野山の草やしばを刈り堆肥たいひを作ったのが唯一の肥料であったが、この作業を休んででも参拝に行けというのも虫除けの御利益ごりやくをたたえたものであると共に、農民の毎日の重労働むさぎを労らう意味もあった。稲の作り込みも大体終わった時期でもあるので男達は誘い合って楽しい参拝旅行をしたのであった。

御祈祷の今昔

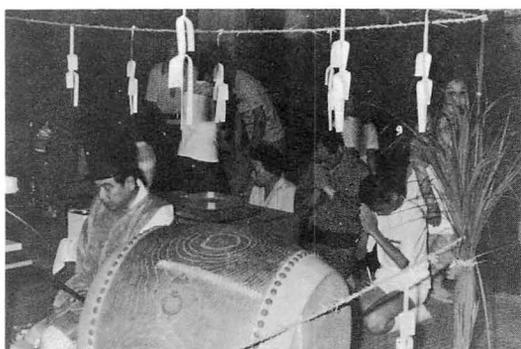
年始の御祈祷については一月の項で述べたが、永野

区においては年二回行っている。一月と土用入り三日目に夏祈祷を行う。まず格番（五軒が一組となった当番の家）が準備をするのである。堂元（会場になる家）の家に男女が集まり、献立表を作り、男子は買物、女子は料理を担当し大抵五皿くらい作る。口取り・一匹魚・煮物・和物あえもの・湯豆腐、時にはいづみやも作る。御飯は白飯に汁がつく。午前十一時頃神主と戸主が集まり、神妙のりとに祝詞を唱え、祈祷が終わると区長より協議事項が出され、それが終わると宴会となる。堂元になる家は家祈祷やぎとうにもなるため名誉とされている。

現在も御祈祷は続いているが、格番制も、堂元制もなくなり、会場は公民館となり、料理は誂あつえでするようになった。祈祷は午前中で終わり、午後は総井手掃除をする。この行事は今も続いているが、そこに村のよさがあるように思う。

輪越し

輪越しは太陰暦の六月末日に行われていたが、今は太陽暦の七月末日に行われる。当日までに宮総代や世話人は、茅を刈り集め束ねて直径二メートル位の大きな輪を作り、お宮の拝殿に人がくぐれるように準備しておく。



氏子の長寿を祈る輪越し

各家庭へは人形に切り抜いた「ひな形」が家族の人数だけ配られる。家ではそのひな形一つ一つに、生れ年の干支、年齢、男女別を書き一夜寝床の下に敷いて寝て、翌朝それで身体をなでさすり、特に悪い箇所のある人はそこを丁寧なさすり、罪汚れをひな形に移してお賽銭を添え

てお宮に納める。

神主はこれを一枚一枚祝詞を唱えながら拝む。水無月の輪越の

祓いする人は

千歳の齡を

延ぶというなり

とお祓いをして下

さる。その時社殿に

作られている茅の輪

を三回くぐって正面

で改めて拝礼し、夏

病除けをするのである。

その夜子供相撲の行われる地区もあった。

暑い夏の夜、青田吹く夜風によつてお宮の太鼓が響

き渡り、浴衣がけで夕涼みがてらの集いも楽しみのも一つ

である。



輪越しのひな形



たなばた

昔は、太陰暦で行われたが、現在は、太陽暦で八月六日、七日を祭っている。

子供達は、六日の朝早く起きて稲の葉の露を集めた。稲の露は少いので里芋さといもの葉の露を取ることもあった。

次に今年生えた二メートルくらいの笹を切つて来る。五色の紙を短冊たんざくに切り、朝集めた露で墨をすり、色々文句を書くのである。一例をあげると、

七夕たなばたの戸渡る舟の梶かひの葉に

思いしことを書きや流さん

天の川 銀の星 七夕様

ひこぼし様 おりひめ様

年に一度の七夕様よ

お逢あいなされよ 天の川

などと書いたものである。牽牛星けんぎゅうせいと織女星おひめせいは、天の川の兩岸を守っておられるので年に一度だけ七夕の夜二人が逢えるとされているが、雨が一粒つぶでも降ると天の川は大水が出て渡ることができず、従つて一年に一度の二人の逢う瀬はなくなるのだといわれている。

子供達は、七夕様を書くとき字が上手になると一生懸命に書いたものである。

昔は、読み・書き・算盤そろばんといつて字が上手に書けることは処世の道の一つの大切な条件とされていた。

書いた短冊は、シユロの葉を細くさいた紐ひもで一枚一

枚笹に結びつけて、軒の捨て柱などに立てた。

又、色紙を二枚合わせて美しい綱を切り一番上に吊るした。これは稲がよく稔って、綱で引き上げられるほどできるようにと願ったものである。子供達は、上手に提灯も作って吊るした。

お供え物は自家でできた南瓜・胡瓜・茄子・インゲン豆・ほうずきなどで、夕方にはつけ団子といって米粉または小麦の粉で団子を作り、この日ばかりは小豆餡の甘いのをまぶしたものを供えた。

どんぶり鉢に水をなみなみと入れたものを織姫様が水鏡として使われるように供えた。その後の水で女の子は顔を洗うときれいになるといわれたものである。

夜になりよく晴れた空には銀河が南北に流れ、その両側に一等星の牽牛星と織女星が輝き、白鳥座では白鳥が大きな羽根を拡げて南の空へ飛んでいるさまは、今でも我々をおとぎの世界に遊ばせてくれるようである。

この七夕祭りは、ラジオ・テレビのなかった時代に子供も大人も夏の楽しみが一番大きなものであった。また、この夜は、天から毒が降るといわれていた。こ



の毒のため何を洗ってもよく落ちるといって、神様のおすすぎや仏様の器具なども洗った。家によると仏様のお茶湯茶碗は、年に一度この日だけしか洗ってはいかないとされていたとか。定めしお茶碗の中は、茶渋で黒くなっていたことであろう。

この日、井戸掃除も行われた。女の人は髪を洗い、髪道具も洗ったものである。この頃は、稲は最も成長の盛んな時期であって、葉も丈夫に育っているのです。この日に田へ入ると稲の葉で目を突いて盲になるといわれ、田の中へ入らないことにしていた。

七夕笹たなはたさぎは、翌朝子供達が表川や泉などへ流しに行つたものである。小枝を一枝便所の垂木たなまきに挿して、一年中まつり翌年の七夕に取り替える家もあつた。

お 盆

旧暦七月十五日を中心に先祖の仏様をおまつりする行事である。先祖の霊をお迎えして供養するだけでなく、家に関係のない浮かばれないで迷い苦しんでいる無縁仏や虫けらにまでお供えをして供養する。これは仏教の經典に基づいて、その教えに従つてする行事である。

八月十二日までにお墓掃除をして、しきみのはなを立てる。十二日を「盆の入り」といって入りはなは立てるものではないという考え方があるからである。この盆の入りまでに仏壇をはじめ家の内外をきれいに掃除をして、先祖の霊をお迎えする準備を整える。軒下には無縁仏をお迎えするために「しよろ棚(精霊棚)」をいもしつらえる。縁の下には虫けらさんにお供え物する芋

の葉などを用意する。

十四日には家の前とお墓で迎え火を焚いて、あの世からこの世への道を明かるくして先祖の霊をお迎えする。迎え火は「オガラ」といって麻の木がらと、細かく割つた松の木を小さな束にしたものを焚くのである。

仏様をお迎えした仏壇にはお料具膳で食事をお供えする。そのほか果物・お菓子・そうめん・おだんごなどが供えられる。仏様を供養する気持ちがある人々の心の中に深くくい入つていたことを強く思う。



8月14日の迎え日

前年の盆以後に亡くなった人のある家では、新盆といつて、旧暦七月にはいるとお寺で長い白布に字を書いてもらつて家の庭先に立てる。又、新しい灯籠を買つきてともし始めをする。この灯籠は盆の月中、三年間ともすのである。新盆の家には親族や知人・近所の人々が盆見舞に来る。大抵はお供え物としてそうめんを持つてくる。

十四日の晩には組の者がお地藏さんに集まつて念仏を唱える。それから組中の家に門念仏かどねんぶつを唱えて廻る。新盆の家では座敷に上がつてねんごろに融通念仏ゆうそうねんぶつを唱えて供養する。終わつてから簡単な御馳走にあずかりながら亡くなった人の思い出を中心に話し合う。本当に仏さんがうかばれるような気持ちになる。

十五日は夕方先祖の霊をお墓へお送りする。送り火を焚いてお墓にお供え物をして線香を立てて拜んで帰る。

盆は働きに出ている家族の者や血縁の者が帰省して、先祖の仏様や里の人々と睦み合う宗教的なくらしのひとときである。

十六日はいわば人間のお盆である。ご馳走をいただいて休んだり、遊びに行つたり、家族の者とだんらんしたり、楽しい一日である。

この日若嫁さんや奉公に出ている者は「やぶ入り」といつて里帰りをして、お墓参りをしたり、ゆつくり休んだりした。実家では御馳走をつくつて歓待し、お嫁さんや奉公人は本当に足腰を伸ばして日頃の労苦をいやしたものである。

十六日の晩には組の者が念仏当たりの家に集つて融通念仏を和讃する。終わつてから皆んなの者が茶菓をいただきながら地域の問題やニュース、その他色々な話題に話をはずませる。これら念仏講の寄り合いは、宗教行事の他に地域の親睦や団結に大きい力となつていた。又、古老が語る稲作や生活体験など、若い者にとつて教えられることが大変多かつた。

盆にはどの家でも子どもたちは決まつたように新しい扇子せんすと履物はきものを買つてもらつた。上級生に連れられて志津川の和田さんのお参りに行つたのも楽しい思い出である。もらつた五銭か十銭くらいのおこづかいで「の

ぞき」を見たり、夜店のかき氷・わた菓子・につけしゆ・線香花火などを勘定しながら買ったことは今になつかしい。

お施餓鬼

南昌寺は八月十日であるが、寺によって日はまちまちである。お寺では祭壇をつくり、別に餓鬼仏さんの精霊棚もつくる。五色の紙に如来様の名を書いて下げる。洗い米の中へ、茄子・胡瓜・人参などを生のまま小さく刻んで入れ、お供えする。

別に水も供える。

太鼓をうち鳴らして大勢の僧侶が読経する。祭典が終わると、参集した檀家の者たちがひとりひとり祭壇に香を焚いて先祖の霊を拝む。無縁仏へもお供えして拝む。そうして先祖の仏様にお会いできたよう

な気持ちになる。仏さんのまつりごとが終わると坊さんのありがたなお説教がある。最後にみんなで会食して宗教的な温かい気持ちになって各々自分の家に帰る。八月十八日は上福寺のお施餓鬼がおこなわれる。以前は約百個の行灯をともし、露天商が店を張り、「のぞき」なども興行されて盛大なものであったという。

うら盆

旧暦七月二十四日である。地区にはどこにでもよくお地藏さんを見かける。盆の月にはいると組の当番の者がお地藏さんを清掃して、毎晩お灯明をあげる。二十四日は昼間から果物・おだんご・お菓子などをお供えしておまつりする。主婦は黄な粉むすびをこしらえる。晚にはお地藏さんの前に敷物を敷いて組の者が集まって融通念仏を唱える。終わってから持参の肴で一ぱいを楽しみながら語り合う。黄な粉むすびが配られる。お参りに来る子どもたちにも配る。このむすびの味は私たち子どもの頃のなつかしい思い出である。



このように地域の色々な行事には、必ずといってよいくらい子どもへの配慮があつて、本当に待ち遠しいものであつた。そのためか地区のおじさんやおばさんと仲良しであつた。今思うと、これが地域の大きい教育力だったのである。

百八灯

吉久地区では百八灯の行事が七月二十四日裏盆の日に行われていた。現在は新暦八月二十四日に行われる。

子供達はこの日のために一か月くらい前から斉灯の材となる女竹おんなたけを河原の土手や山の入口などで集め、長さ一メートル、まわり二十センチメートルぐらいの束たばを沢山作つたものである。また各家庭でもこのような束を十束くらいづつ作って待っていた。

二十四日の晩には表川の堤防で上組・下組・畑川組と三組に別れて

「太郎たろうも来い 次郎じろうも来い」と大声で呼び合つて仏を呼びながら集めた斉灯材に火をつけるのである。三組

の子供達は自分の組の火が一番よく燃えるようにと競い合つたものである。

方法はまず火元もとに火を入れる。火元とは枯れ枝や枯れ草を集め結ゆわえて束にして松の木の枝に吊り下げたおき火をつける。これを種火として、次々に斉灯に火を点じていくのである。斉灯の立て方は、大きな石を置き火をつけた斉灯を乗せ、足下にこれをおさえるように石を重石おもしに置くのである。

あくぼができて下火となるととどんどんたいて火を燃えたたせるのである。



水難にあった人の慰霊のために行われる百八灯 (昭和50年ころ)

火元の束からはばらばらと火の粉が散るのが花火の
ようで美しかった。

これは、川で流れて死んだ人や無縁仏の霊を慰める
のが目的であったが、夏の夜の火の祭典として、宗教
的な行事の一つとして親しまれ、近在の人達はうちわ
を片手にぞろぞろと見物に行ったものである。



昭和35年頃百八灯の準備中子供らが手にもつのが「サイト」

9 月 お 月 見



お月見は、陰曆の八月十五日、美しい満月を神にみ
たてて秋の収穫物を供えて祀り、夜を楽しんだ素朴な
行事である。縁側へ机を出してすすきを立て、芋やお
だんごを供えた。この日初めて里芋を掘り食べるので

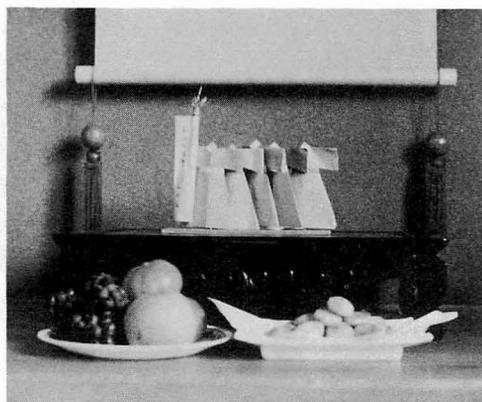
あるが、初物のことであり非常においしかった事を記
憶している。月の影を見て子供達に「あれは月で兎が
餅つきしている影である」と話したものである。今
日のように月が人がロケットに乗り行くようになって
は昔のお伽話の夢も消えてしまつて寂しい感がする。
この夜の月を「芋名月」ともいつて新しい甘藷や里芋
を一番にお供えをする。手臼でひいた米や小麦の粉の
団子と煮つけの小芋の味を賞で、まん丸月を眺めなが
ら「芋か団子か団子か芋か」と、はしやぎ家族一同が
円満に憩うのである。また風流人は和歌や俳句を作つ
て楽しんだ。神社の奉納額に当時の俳人の名が句と共
に残っている。南方村の柳枝・梅園、則之内村の梅月
ならびに井水、滑川村の雪竹・霍巢、河之内村の涼杜
・五楊・花眠などの俳人が当時活躍したものと思われ
る。一年中で今夜の月が一番明るいのである。

たのもさん

この日は二百十日前後にあたり、大体稲の作り込み

も終わった頃であるが、秋の稔りを願うての祭りである。

たのも人形を作る。人形は家族の数だけ作り、色紙を表とし裏は白い紙を下着として、帯も結びせ頭は小さな角い紙をつける。たかきびがらを胴にして板に釘を刺したものに立てる。一番はしには「八幡大菩薩」と書いた旗を立てて、これを神棚へ祀る。



これは毎年この日に新しいのと取り替えるのであるが、多分に厄除け的な意味が含まれている。この日は午前中で仕事を休み、たのも団子を作って神様にお供えし、家族も腹いっぱい食べたものである。

まがり 曲里の観音講

時代はいつの頃かはっきりしないが、曲里に大変信仰心の厚い長者が住んでおられた。何不足ない生活をしておられ、四国八十八か所順拝にも幾度も行かれた。高野山に参詣したおり、西国三十三か寺の順拝を思い立たれた。そして、自分は恵まれていてこのように寺々を順拝することができるのであるが、貧乏でお参りができない人や体が悪くて参詣のできない人のために西国三十三か寺のお庭の砂をいただいて帰り地方の人達にも自分と同じようにもつたいない寺々のお庭砂を踏ませてあげようと思われた。寺々では用意した袋に砂をいただいて帰り、自分の土地に立派な観音堂を建て、庭にはその砂をまいた。仏師に依頼して三十三体の観音像も彫らせて、八月九日に開帳をされた。

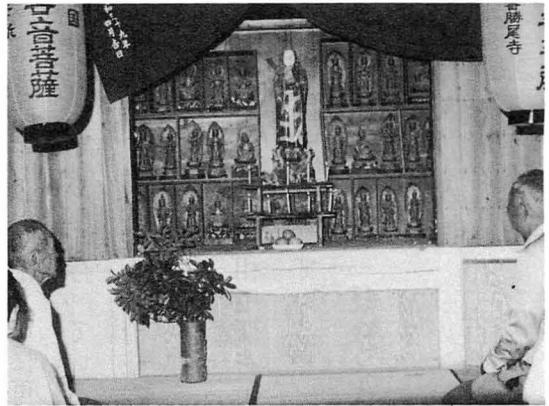
長者は、これから先この観音様はこの地方の守り本尊となつて下さるであろう、そうするためには基本金が必要だといって、一斗枴にお金を一杯入れ、紙幣は笹に

つけて観音堂前に立てたという。これが大変な評判となって参詣人が多かつたとのことである。それから後もこの地方の人はこの日を記念日として毎年八月九日には青年達は芝居をして長者の遺徳をしのんだ。

曲里・八幡・道向どうこうの三区では大東亜戦争前までこの縁日前にはローソク代を集め二・三戸で一張りの提灯ちようちんを作つて観音堂に吊るしてこの日を祀つた。また店を出す人も沢山あり、子供達は小遣銭こづかいせんをもらつてお参りを楽しんだものである。

曲里の辻に石灯籠があるが、あれはこの長者がこの地方に悪疫が流行した時祈願のため立てられたともいふ伝えられている。

長者は三代続かないとの例えのとおり、この長者の跡



も今はさだかでないが、観音堂は今も立派にあり老人達をよくお参りして前の縁側を憩いの場としている。

秋の彼岸

「暑さ寒さも彼岸まで」の諺ことわざのとおりこれからだんだん涼しくなつてゆく。夜と昼との時間が同じ長さになる。

これから昼の時間が日ましに短くなつてゆき人も家畜も元気になつてゆくのである。

家々には国の祭日であるから国旗を立てる。初秋の風も心地よく、農家は今年の豊作を願っている。家では先祖の墓参りをした。人々は保養をかねて近郷の農作物の成長ぶりや作り方を見学しながら、気心の合つた友人と四国霊場の浄瑠璃寺じようるりじ・八坂寺やさかじ・浄土寺じようどじ・繁多寺はたじ・石手寺いしでじ・太山寺たいさんじ・西林寺さいりんじの七か寺詣もうでして豊作を願つた。またお社日には八幡神社をたずねて八社詣もうでをする人もあり楽しい一日旅行をした。収穫の秋をむかえて何かと準備をするのである。

おぜんじさん

井内と直瀬なおせの分水嶺にそびえる山々を十六善神にちなんで善神山ぜんじんざんと言っている。山はけわしく修験者の行場ばに恰好かっこうな所となり、いまも小さな祠ほらが祀まつられている。この山は断崖をあがった山頂にあつて、土地の者は「おぜんじさん」とよんでいる。又、中野組には前善神社ぜんじんじやがあり奥善神おくぜんじんと一体の社むらとして尊崇されている。前善神の拝殿は雨乞いの祈願所として明治九年に再建さいけんされ、昭和十七年には屋根のふき替えを行っている。しかしながら組員の激減と維持の困難も伴ともなって榎柱えんちゆうの拝殿も廃屋寸前となっている。

文化十二年丙子年ひつねねには、則之内の庄屋宇和川初右衛門の献納した礎石など記名のもが現存している。

雨乞いの時は組の者二人が一組となつて一昼夜交代でおこもりをし奥善神へお参りをした。

結願けつがんで雨をいただいた時は、組中の者が出て百八灯をたいてお礼をした。

「おぜんじさん」へ雨乞いをするると大ていの雨がもらえるというので、遠くからお参りに来る人もあつた。

これら雨乞い祈禱きとうの正大先達をつとめたのが修験者胎宝院たいたいざんの法印である。法印が祈禱を始めると白蛇や黒蛇が胎座たいたざのぐるりを廻わり白黒の色別で降雨の有無をうらなつたということである。

胎宝院は中野馬地にあつたが、いまはなく中野薬師堂に「不動明王」の厨子ずしが合祀保管されている。

胎宝院の記録によると、明和五年七月十六日には、権大僧都補任院號職ごんだいそうずほにんいんごうしやくなる補任状ほにんじょうがあり、その他数代にわたる修験者の墓が残り昔の繁栄ぶりがしのばれる。寛政八年の補任状や、天保十五年には僧正法印光心からの書状なども残り、権威ある修験者であつた事がうかがわれる。

お通夜は旧暦八月十四日（現在は太陽暦九月十四日）で、昼の間に前善神さんのお堂の掃除をしてお参りをし代表の者が奥善神へ参拝に登つた。

子供達は各戸を廻つて、米や野菜を集めた。夕方から組中の老若男女全員が胎宝院へ集まつてお通夜をした。

その夜は、ごもくのにぎりめしをし、茄子・南瓜・茗荷がなどのおかずをつくってみんな楽しくいただいた。

子供達は、明るいい月あかりで影ふみ鬼ごっこをして遊んだり、おにぎりを食べたたりすることを大変な楽しみとした。

大人は娯楽が少なかつたので酒豪も多く一斗余りの酒をのんだ。興じてくると「けん」を歌ったり「木まくら」を使って歌ったり、伊勢音頭や浄瑠璃をかたつたりして夜を明した。

善神さんの相撲すもうは旧暦の九月十四日に行われる。月明かりと大きな木の根などをもやして明かりをとり相撲をとった。当日は学校で相撲のある事を友達ふいぢょうに吹聴し友達をさそって参加した。

相撲は胎室院でとるのが恒例であったが、胎室院がなくなつてからは、各戸が順番で田の稲を早めに刈つて、田に土俵をつくつて行った。その日、組の者は土俵をつくり、おにぎりをこしらえて接待した。

相撲は三番げし拔、五番げし拔などがあり五番拔は特賞でご幣へいをいただき最高の名誉とした。

賞品は学用品のノートや鉛筆などが多く、近隣の子供達が参加してにぎやかだった。時には青年の相撲もあつたが、昭和三十年代に入つてテレビの普及や参加する子供の数が少なくなつて、ついに楽しい行事が一つ消えた。

10 月

秋 祭 り



秋風と共に毎夜獅子太鼓ししだこが聞こえてくるようになる。「祭りだなあ 忙しくなるなあ」と思ったものである。二百十日もことなく過ぎて、稲は黄金の波をたて農家にとって収穫期のひとくぎりでもある。

十月六・七日は松山祭りである。我が川内町の祭りは十月十三・十四・十五・十六日の四日間で中通り祭りと言われている。

川内町には十社に余る氏神さまがある。その大半に獅子舞い（獅子起こし・おやし・おやす・子役）があった。祭りになくてはならない行事である。この獅子舞いは一か月余りの稽古けいこを行ったものだ。獅子起こしは子供が演じる。稽古日には若衆が毎晩背負って送り迎えをしたものだ。

この行事は、青年団が一手に引き受けていた。（しながら先輩の指導のもとにそのきびしさは口では言えないものがあつた。）当時は青年団を「若衆連中」と言い、小学校を卒業すると家に居おる者は皆二十五歳までは入団し、退団は許されなかつたのである。

この行事についての賄まないは一般家庭からの寄付で支えられ、部落住民が一体となつていた。

家庭においては、子供の晴れ着づくりや豆腐造り、酒・肴さかなの買物をして来客を待ったものである。

お宮では、神主様と宮総代さんの指示に従い幟しほ立て、

境内の清掃などをした。十三日が宵祭り。十四日はお神楽がある。このお神楽が川内町ではどのくらい行われていたか定かでない。いよいよ十五日は神輿渡御である。当日は、前日からの来客の接待をし、子供たちにはそれぞれ晴着を着せお宮出しに急がせたものである。

境内では一番太鼓が打ちならされて「早くこいよ、集まれよ」と鳴り響く。若衆連中は獅子舞い、宮出しの準備でてんでこ舞いである。獅子起こし、おやじ・おやす・子役が揃うといよいよ本番である。境内は大勢の人の輪である。娘は振り袖、男子はわらじばきで浴衣にえどそのたすきがけ。子供は法被姿に「祭」の文字入りの豆しぼりの鉢巻をし、たすきに鈴をつけ、それぞれ晴れ姿であった。

お面を付けて紋付衣装のおやじさん。妻のおやすも面をつけ種物袋を肩に持ち登場。おやじの耕した後におやすが種をまく（この動作が滑稽である）。猿や狐が出てきて種を拾ったり悪戯をしたりする。おやじとおやすが追い廻し縄で縛って終わりである。代って休み



太鼓の一切りがあつて終わる。

昭和20年代初期北方地区獅子舞・旧北方会堂にて

と神輿の練り、鉢合わせがある。親睦と団結による平和の表現であると思うのである。

秋祭りもお宮入り（神輿から御玉出しの儀式）をもつて終わりである。

十六日は小祭りである。幟を下し境内の清掃をする。若衆連中は神輿・獅子頭・太鼓の手入れの後、算用祝といつて慰労会で総仕上げである。楽しかった祭りを終わって明日からの稲の刈り取りに意気込んだものである。

道 つ くり

毎年台風やその他で破損した個所を修理する道づくりをするのは、九月末から十月初めに行う。道作りは、大別して大部落の道作りと小部落の道作りに、耕作地や山道作りなどがある。いずれの道作りも指導者の連絡で指定の場所へ集まり、相談の上分担して仕事を始めるのである。初めに刈って行く者、鍬で掘り直す者などさまざまにする。薪炭の必要なる時の山道は距離が遠

いので骨がおれた。農作業に便利だけでなく、郵便さんや警察官などの通行にも配慮した。自分達の道であり、自発的に道作りをしたものである。不参者は非常に少なく、同じ関係者が一緒に仕事をし、終了後は簡単な手料理ではあったが一杯交わし、又、部落の相談ごともし一層団結と親睦を深めたものである。田舎ほど道作りの多いのが実状である。

白 王 さ ん

新暦の十月十六日は白王山神のお祭日である。問屋の組中が信者で約二百年くらい前から今に祀り続けている。昔、境内の大銀杏を二百四十円で売って基金ができたという。今の二代目の銀杏は樹令百三十年くらいであるらしい。銀杏の実も多量に取れるという。昔は神田が二反ほどあったが農地改革で失った。祭りの当日は、氏が地下蜂の巣を掘ってきて巣より子を引き出して汁をしぼり取り砂糖をまぜ酒に入れてわかして蜂酒



昭和30年代滑川万歳 演者が女性になっている。

を作り、子のごもく飯に野菜と共に煮込んで蜂飯を炊いて一同会食をしたのである。白王さんを中心にして円満な生活をしている土地である。



明河、海上、九騎地区にはみこしがなく、祭りには滑川万歳を楽しんだ（大正9年撮影）

11 月 亥 の 子



陰曆十月の亥の日を言い、作物の神様である大黒さんに豊作を感謝し、やがて迎える冬、正月のための準備する新穀祭でもあった。この「亥の日」は普通、月二回巡りくるのだが、年によると三回の時もあった。

遠い昔は第一回目は武家が祝い、二回目は百姓が、そして三回目のある時は商工業者とされていたが、近くは二回目の百姓のみの行事とされていた。

この日には新米で餅をつくか、ボタ餅をこしらえる。餡も黄粉も新穀で香ばしい味と香りはともおいしく、それで自家用ばかりでなく、親類や心易いむきにも差し上げて大変に喜ばれた。この時期にはまだ粃すりが終わっていないのでわずかの餅粃を櫓つきして白米にしていた。

神棚の大黒神には一升杓に餅と二匹の干魚と柚子を入れて供え、新鮮な大根も二本揃えて飾った。別の神さんにも一緒に海・山の御酒御饌の種々を供え灯明をあげた。そして家族の者も五目飯などのご馳走をした。

祭りといっても人々の往来はなく、ただ子供の子供の行事として「亥の子つき」の思い出がある。

新藁を両手で握れるくらいのも束にして横四・五か所を強く結んで棒型にする。穂先をあんて扱いて易いようにした。器用な人は里芋の茎を藁棒の芯に入れて打ちたた

く音を高くした。これを「亥の子筒」という。夕暮れが迫る頃五・六人の子供が組をつくり農家を廻る。軒下か漆喰で固くした庭を、この「亥の子筒」で数え歌をうたいながら打つてその家の繁昌を願った。漆喰とは、セメントのない時代に山の土と生石灰でたたき固めたもので音はよく響いた。満足した主人はその労に酬い幾許かの小銭やみかん、餅をお礼した。子供らも喜び勇んで次の家を廻った。金は後で相談しそれなりに使っていた。

数え歌

- お大黒さんという人は
 一に 倭 踏まえて
 二で ニツコリ笑ろて
 三で 盃 取り交し
 四ツ 世の中 よいように
 五ツ いつもの ごとくなり
 六ツ 無病 息災に
 七ツ 何事 ないように
 八ツ 屋敷を建て拵げ
 九ツ 小倉を建て並べ



十で とーんと

納めた

繁昌せえー

繁昌せえー

これで喜ばない人は
 なく、一銭でもよけい
 奮発しようかという気
 にもなるに違いない。

ところがこんな歌も

残っている。少々子供

心にも気にくわれない所へ廻った時に、亥の子束か、またはゴーリンさんと言って丸く作った石の中のくぼんだ所に輪を通したものを持って行って

イの子ーイの子 イの子餅ついて

祝わん者は 鬼生め 蛇生め

角の生えた子生め 貧乏せえー 貧乏せえー

と一つきして逃げて帰る。これは悪霊を退散させるためか、子供にさえ嫌われないように善根を施せとの戒

しめであろうか、今に解しかねる。

使った亥の子の藁束は果物の木に結びかける。特に柿の木につけるが、翌年から大粒の実がつき、しかも味もよく柿の仲買さんの評判もよいとされた。

亥の子相撲も盛大に行われた。町中央にある大宮さんの境内に時ならぬ喚声があがる。

地元の勧進元では一か月も前に町内から寄付をつのり景品を山のように積んで飾り、各地からの参加を歓迎した。子供達は当日までに篝火用の木材を集めて協力した。亥の子相撲は子供ばかりでなく青年や中年の素人力士も参加し殺気立っていた。

一段高い所にある境内の篝火は天を焦し、火の粉は四方に散った。勝負の鬨の声は鎮守の森に木霊し夜半まで続いた。

この亥の子の日に限らないが、この頃に小型の相撲が各地に催された。小坂区の鎮守相撲、上砂区の弁才天相撲、森区の天神相撲などがそれである。

亥の子の日には大根畑に入ると大根に筋が入ってもその用にたたなくなるとか、この日から炬燵が入れば

火難を除けられるとか言い伝えられている。

粃 すりまで

秋十月ともなれば稲の穂はゆれる。軽い草刈鎌でサクと音を立てて、根元から刈りその場に揃えて地干しをする。腰の痛い重労働ではあるが収穫の喜びと、好季節で何故か楽しく疲れない。

地干しは二・三日ですみ、一応一か所に集め積み重ねた藁の積み重ねたのを「藁ぐる」と言うが、今では余り見かけない。

天気の良い適当な日に千歯（千把）にかけて粃を落す。千歯は古い脱穀用農具で、幅一・五センチ、長さ四十センチの鉄片を二十本くらい櫛の歯のように差し込み、これに稲または麦の穂を引っかけて藁と粃とを分けるものである。千歯で粃をお落とす作業を千歯コギと呼んだ。これを賃仕事として請合い一斗枡一杯で二・三錢位のコギ賃を稼ぐ風習もあった。

持ち帰った粃は「蕙干し」として

三・四日くらい、

広い庭に蕙を並べ

て十分に乾燥させ

粃倉か蕙を丸くし

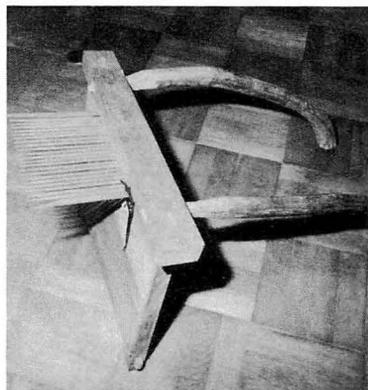
た円筒に入れて保

管する。朝晩の蕙干しの出し入れや、日中の裏がえし

は老人子供の役目だった。

いよいよ粃すり作業に移るが、大抵の場合麦の播き付けも終わり十二月に入っていた。倉か長屋で昼間から始めたが夜中に及び、時には夜明けになる時でもまれでなかった。薄暗い石油ランプの中で汗と埃にまみれての重労働であった。

粃すり臼は、初めどう臼（男臼）と言ってやり木で上臼を廻すもので、竹の輪縁の中に黒粘土を詰め、櫛の割歯を刺し臼が廻り易く粃殻の取れ易いように上下を噛み合せていた。大正の終わり頃に「女臼」という木の枠の中に臼を入れ足踏みで下臼が回る多少改良



千齒（川内中学校）

されたものが入ってきた。原動力は原始的な人力以外になく、やり木（遣木）または手木とも言ったが、三・四人が並んで握り引き回した。長さ二メートルくらいはあった。

まず粃かけさんが上の穴から入れるわけだが、絶えず回っている金具の隙間から入れなければ金具に弾き飛ばされるので余程の要領がいった。

遣木には屈強な男衆がリズムを取りながらくるりくるりと回していたが、調子が狂うと能率が落ちるばかりか疲労が倍加する。そのために粃すり歌を歌って勇氣を鼓舞した。

くるりくるりと回るのは淀の

淀の川瀬の水車

川瀬のヨ川瀬のヨ 淀の川瀬の水車
つれていのぞや お月が出たら

伊子の金子のお城元へ
金子の金子の 伊子の金子のお城元へ
とんどとんどと すりやげてしてもて

道後の湯へ行こうや

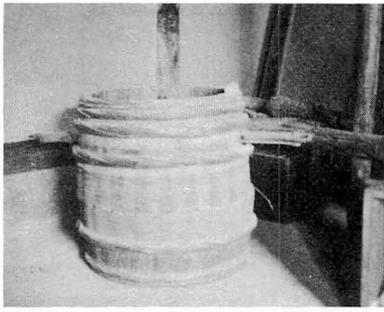
道後の道後の 明日は道後の湯に行こぜ

時にはおもしろおかしく剽軽な替歌も歌った。

賃ずりボイトは一升飯くろて

昼ねて昼ねて 夜を稼ぐ夜を稼ぐ

すった粃は唐箕にかけて風力を利用し、粃殻は外へ飛ばし、米粒は更に「万石」にかける。ここで、未熟の青米や碎米のいわゆる屑米は当然オミットされる。



男うす

この「万石」には太目と細目の二台があつて、両方で嚴撰され上質のものだけが最後に米俵に量り入れられる。時にはまだ粃のまま出てくるものもあるのだ、これは逆もどりにて再び臼ですり直される。

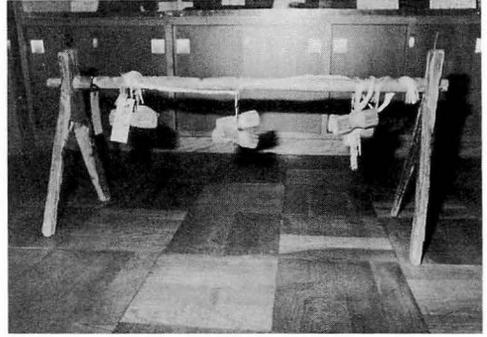
俵製がまた、大変だった。

かねて用意された内俵と外俵の二重袋で包まれ、上下の口は盆のような丸い棧俵で塞ぐ。一俵は四斗、六十キロの米俵となり、横縄は中央とその両側に二か所計五か所を二重に回して堅く結び、縦縄は祝ごとには十文字に入れたが大抵の場合は省略された。

この一連の粃すりは男女、中子供を合せて少なくとも八名は必要で、各人がオートメーション式に運び一か所欠けても事は運ばない。従つて家族だけでは足りないので隣近所か縁者の「イイ」又は「コーロク」の相互扶助で済ませた。今日の手間替のことである。その手間



わらぐろつみ



替もできない家では一俵いくらかの「賃ずりさん」に頼んだ。

当時の唐箕、万石等の小道具は各自が備えていたが、すり臼は四、五人の共同購入か、賃借りをしていた。

今日のコンバイン・乾燥機・粃すり機など大型で高価な

農具類と併わせ考える時、感無量なものがある。

夜は長く外は寒い。夜食に鯖の刺身つきは上等で、豆腐汁に松前町から来るおタタさんが置いていった煮干し、油揚げに屑米の炊き込みで空腹を満たした。

かくて農家最終最大の作業も無事終り内庭に米俵を積み重ねて安堵の胸を撫で下すのである。そして大黒さんに新米と灯明を差し上げることが忘れない。

12 月

み う ま



ところにより坎日かんじちとも言つて曆の上では諸事しよじに凶きやうとされ外出を忌む日とされるが、一般には新仏の正月行事とする。

陰曆十二月の最初の巳午みうまの日に、昨一か年間に死亡

して新仏に仲間入りした者がある家へは、身につながらる者や特に心易い人はたとえ案内がなくとも死者のために行つて恰まさも生きていると同様に正月の行事をする慣わしである。

年によると二軒も三軒もある場合があつても、それぞれ手分けして礼れいを欠かさない。だからカン日のない年は祝えと言われるくらいであつた。

その家では、前日までにお墓そとを掃除して正月並なみに門松を立て藁わらのしめ飾りを張り山草やまくさもつけるが、総て逆さかに飾るのを常とした。干柿ぼしがき、みかんも忘れない。当日は早朝に餅をつく。決して前日ぜんじつについてたり序ついででだと言つて二白にびやく以上もついたりしない。それ故に一白餅いちびやくや一膳飯ぜんめしをいやがるわけである。

当日は、皆が揃そろつて午の刻うま(正十二時)に墓参りし持参の餅を藁わらを焚たいて焼く真似まねをして包丁ほうちやうの背せで切りその先に突き刺し、肩越しに客に渡して食べて貰もらう。そして一切きれでも残したり持帰もどつたりすることは禁物とされていた。人に食べ物たべものを渡す場合、刃物はぶたの先につけて渡す者があるがこれは危険であるばかりでなくこの風習

からも嫌きらわれているからエチケツトを守りたいものだ。このようにしてユーモアたっぷりたつぷりに安心して仏様に成も仏ちして貰もらう。同じ墓参りでもこのおりに坊さんは同行しない。

所によつては夜の十二時に墓参りする者もいる。その場合は大抵、早朝のまだ鳥の鳴なかない薄暗うすぐらい時刻を選んでお参りするのだがこれは余り見かけなかった。

なおその日ついた新餅は如何に堅かたくなつていても、決して焼いて食べてはいけない。もし知らないで焼きかけると「巳午みうまの餅」みたいに焼いてはいけないと母から強つよくたしなめられたものである。

わ た ぎ

十二月上旬に行う。子供の成長を祝い将来の健康を祈念する行事である。

その年に生まれた幼児のある家庭では、嫁の里から一つ身の綿入着物か、それにかわるモスリン等の着物を八尺か一丈を「わたぎ祝い」として贈おくるのを例れいと

した。子供の成育を祝うばかりでなく、とかく肩身の狭せまい嫁の立場を思いやり、隣、近所への見栄ともなつた。嫁の里ばかりに限らない。他の親類や平素心易い人からも祝いの品が届いて床の間を飾かつた。

家ではこれに応こたえ、特別に大きくした餡あん入りの餅について配り、その夜は一同を招いて一献差し上げる。丁寧な家では産婆さんにまで届けたものであった。

生後、男子は三十日、女子は三十三日で氏神うぢさん産土すな神かみに氏子の仲間入りの初参りをする。たいていはお祖母おばあさんが抱いて参詣するが、子供には立派な打掛風の着物に幅広あびひろくうたて長い帯紐おびひもをお祖母さんの背中で結むすんでいる。神前では元氣な泣き声をあげさせて氏子の籍入れを確認させる。もし眠っている時は祖母の愛情で爪切つまきつて泣かせたほどであった。

わたぎに限らないがお誕生日には一升餅を背負おんわせて歩かせてみる。二歩でも三歩でも歩けば、「この子は丈夫だ、利り発はつだ」と親は手離しで喜び、相好あいきをくずした。

数え年の三歳ともなれば「紐ひもはなし」と言つてこれ

も里方から女の子には厚い結び帯を、男の子には兵児帯を貰い「結び初め」をさせる。それまでは着物の脇下からつけ紐を通して後ろから結んでやっていた。

時代も趣味も変った今日ではファッションの流行で蝶ネクタイの豆紳士や花嫁姿の女兒がこれも着飾った母に連れられて神社や公園に出かける。これをカメラを持った父が追いかけて廻りシャツターを切る。これを見る目もほほ笑ましい光景で彼等の上に幸多かれと祈りたい。

話は多少横道にそれるが育児について伝えておきたいことがある。明治、大正、昭和の初めにかけて我が国は「富国強兵」を合言葉に生めよ、増せよ、地に満てよ、と人口急増につとめた。一家で七、八人の子沢山も珍らしいことではなく貧乏な百姓は育てるだけが精一杯で、教育にも躰にも手が届かなかつた。しかしその子が今回の大戦で人柱になったのは未だ記憶に新しい。

いかに生活が苦しくとも、たとえ母体に不安があつても墮胎は法律的にも道義上からも罪悪として処断さ

れた。今日優生学の名の下に闇から闇へ葬り去られる子も多く、今では三人の子持ちははや多いと言う。

当時は施設もなければ医術も未熟で、嬰兒や妊婦の栄養も不足で十分な養生も叶えられない。

母乳不足からくる空腹で赤子は夜半に火がついたように泣き続ける。乳のない母は子供を抱えて共に夜を泣き明かした。貰い乳に心配し、子育て地藏さんに迷い母親は子育てに必死であった。

悪疫流行になす術もなくマジナイや祈祷に走り、ただオロオロと死を見つめるばかりでついに子が死ぬとそれは天命だった、寿命だったとあきらめた。

そのような情況下だから無事にお誕生を迎え、七五三の難関を突破できればその喜びと安堵は何事にも比べようがない。

この喜びこそが「わたぎ」の由来で、親に対する感謝を忘れてはならない。

年貢納め

昔の農地は殆んどが小作地で小作人は僅か一握りの地主階級の支配下にあつた。粒々辛苦の末の収穫米を我が庭につんで喜ぶのも全く束の間で、早や翌日には旦那家に納めなければならぬ。この年貢納めを定米または小作料とも言った。

肥料は無いので山の刈り草で補ない、害虫や病気はクサ油で防いだ。技術も至つて未熟であつたから、不作の場合はただ年柄とあきらめていた。

その頃松瀬川や井内の山田で反当り（十アール）三俵か四俵のでき栄えで町内中央平坦地の上田でも八俵もみのれば大豊作と言われた。この状態の下に山田で八ダン（段）、平地で十二・三ダンから高い所で二十ダンも小作料を納めていた。

一ダンとは一斗（十五キロ）のことだから山田で（六十キロ入）二俵、上田で三俵半から五俵の年貢納めになる。つまり、出来高の半分は納めなければなら

ないことになる。しかも定米は「万石機」と言う撰米機で嚴撰された上質米を要求されるし、故なく延納することは許されなかつた。

万一、等外（規格以下）の不良米が混つていたら、いくら年柄でその土地にできたものであつたとしても、地主の機嫌をそこね信用がガタ落ちになり将来の小作が保証されない。

小作契約は地主の一方的支配だからである。それでも小作人は一言の不平も言えない。涙をのんで上質物と買ひ替える年もあつたと言う。またその反対に地主は幾何の奨励米を出して上質米の納入を促していたこともあつた。このようにして地主は働かずして優雅な生活をおくり、事ある時は床柱を背に人の上位に立つた。



万石

この矛盾と羨望に、百姓は「自作五反」を目標に身を粉にして働き爪に火を灯すように儉約に努めた。

地主には地主としてまた言い分がある。村の収入財源の柱である地租（不動産税）、戸数割、水利費に阿まれ、神社、寺院、公共施設の出費は率先して負担させられて安閑とはしてられない。世の移りかわりを先取りしなければ遅れをとる。明治以来永く続いたこの小作制度も、昭和十四年四月「米穀配給制法」施行と共に金納制に変わり、保有米以外は原則として「米穀通帳」なくしては一粒の米も自由勝手に買えなくなりやがて敗戦と同時に食糧地獄に突入したわけである。更に二十一年終戦処理に農地調整法施行（第一次農地改革）で六反歩以上の農地は小作人に解放された。これによって地主と小作人の地位と経済は逆転した。この小作人の「哀歎史」も今は昔話と流れ去った。昭和二桁以後の生まれの人には実感は湧かないであろう。

ふいご祭り

このお祭りは一般には馴染は薄いですが、鍛冶屋・石屋・鍍掛屋さんにとっては大切な年中行事の一つで、盛大に行われた。

旧暦十一月八日が丁度その日にあたり、職人さんは朝から仕事を休み「ふいご」と槌等の用具はきれいに清め、餅やミカン等をお供えしお幣やお神酒も正月の神様と同様に飾った。

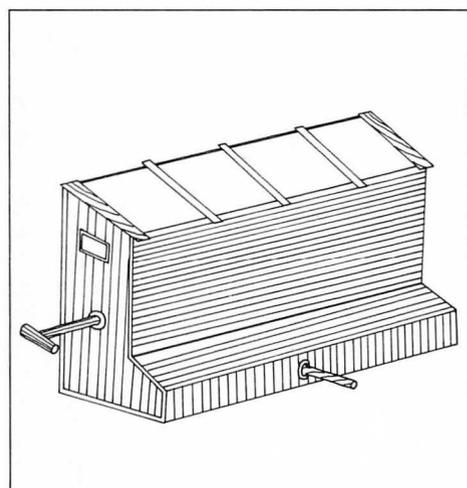
祭神は稻荷大明神と言うことで、商売繁昌、福徳招来を祈願していた。

家ではお餅をついたり赤飯をたいたりして親類縁者や心易い隣近所まで配った。

夕方になると子供等を集めてミカンや餅を投げて拾わせる風習もあった。

夜にはお客を招いて豪華な料理でもてなし、ふるまい酒に夜を更かせ懇親し祝った。

ふいごは図のような簡単な原始的送風装置で、火力



を起し金属を精錬加工するため使用した。箱の中には鹿の皮で作った手風琴ようのパネが入っていてハンドルを手または足の指先で操

作して風を起こし火中に吹きつけて火の力を強めた。

木炭は松の木のホガラ炭に限った。ホガラ炭の火力は柔か^なで細工が容易であるばかりでなく、製品が良質であった。一般家庭に使うクヌギ・カシ・ホーサ等の雑木のかた炭、つまり採暖用木炭は火力が強過ぎて不向きだった。

流石^{さすが}の固い鉄も溶けて職人の自由になった。

ある鍛冶屋さんが餅をつき「餅とり」の丸い型つくりが思うようにできないので「せめてこれが鉄ならば上手に丸められるのになあ」と歎^{なげ}いたという話もあった。

た。

とにかく鍛冶屋は農具や刃物をつくり、石屋はノミの先をとがらし、又、鑄掛屋さんは主として鍋・釜の修理に各地を廻っていた。

針^{はり} 供^く 養^{よう}

昔は、女にとって裁縫は大切な仕事であった。『手をつける』と言って、これが、一人前にできないとお嫁に行けないとされていた。

学校を卒業すると、女子は皆お針屋へ習いに行ったものである。村にはお針の先生と称する人がそこそこのいて、弟子をとっておられた。

お針子と呼ばれる女の子は、そこで二年三年と修業をしたものである。

着物の裁ち方、縫い方、大人物、子供物、特殊な物として、袴・蚊帳・蒲団まで習ったものである。従って針のお世話になることは多く、各家々では針を使っ

て夜おそくまでよなべに裁縫をしたものである。

針に感謝をする意味で、供養をすることが女の年中行事の一つであった。折れた針、錆びた針は丁寧に集めておき、八日にはコンニャクにさして床の間に祭り、この日は針は使わないで、たき込みご飯などを作って供え、感謝をしたものである。特にお針屋では、お針子達は持ちよった品々でごちそうを作って、皆で針を祭り、その後で、かるた取りなどをして楽しく遊んだものである。針をさしたコンニャクは危険な場所などへ捨てないようお宮の石垣の間などにおさめた。

年 末

正月行事のところできわしくのべてあるが、師走しほすにはいつて年間の行事も終り、仕事のくぎりもつき、借金払いからお世話になった方々へのお歳暮も済ませすはらい、餅つき、お飾りさん、門松さん、おたなさん、いただきさん、若水取りなど正月準備をすつかり終えて大晦おおぞろを迎える。縁起そばをいただいで、いよいよ心安らかに希望に満ちたお正月を迎えるのである。

あとがき

稲が黄金色に輝やき、獅子太鼓の音が風につて届くころ、この本の校正刷が届いた。

遙けくも来たるものかな　の感が深い。

この六、七十年、本の刊行などとは縁のない世界に住んでいた老人の、悪戦苦闘の成果がここにある。手にずしりと重い。

本書は、老人の生き甲斐対策の一環として企画されたものである。ここに本書刊行までの経緯を簡単にご紹介しておこう。「次第に忘れられてゆく先人の生活ぶりを後世に伝えたい」として、「昔話を集める会が発足したのが昨年九月のことであった。委員は、十四地区の老人クラブから出してもらった。十二月には講師を招いて勉強会を開いた。

本年二月、それぞれ担当を定めて、昔話の集録を始めた。不慣れなことから、老人故の行動力の狭さなどもあつて作業は仲々進まなかつた。その後、五月、六月と委員会を開催し、検討を重ねた。その結果を「ふる里の記録編集委員会」に送付し、同委員が執筆したものである。大任であった。

原稿が完成し、八月から編集作業に入った。レイアウトに際し、次のような点について注意した。

- 一、年中行事は、各月ごとにまとめる。
- 二、読みやすいものとするため、活字の大きさに配慮する。
- 三、本書を親しみやすいものとするため、できる限り写真やイラストを多く掲載する。この方針に従って、各月の最初のページには写真を掲載した。年中行事の題名とは直接関連のない写真もあるが、その点ご了承をたま

わりたい。

四、本書が、老人の独断と独善におちいらぬようにとの配慮から、次のお二方に監修をお願いした。

年中行事そのものに関しては、重信町下林の森正史先生、文章表記に関しては、北方宝泉の橋本矩之先生である。監修期間が短かったこともあり、作業は深夜一時、二時に及ぶこともあったが様子で、ここに深く感謝申し上げる次第である。橋本先生には、今年十月施行された常用漢字とそれに伴う表記方法についてのご指導を受けたのであるが、折角ご指摘を受けながら、老いの一徹で「この字でないと感じがでない」などと勝手な理屈で訂正しなかった箇所も少なくない。ご寛恕を乞う次第である。

おわりにあたって、本書編集に関し多くの方々からご協力、ご援助をたまわった。ここに厚くお礼申し上げます。

昭和五十六年十月十五日

「ふる里の記録」編集委員会

☐「ふる里の記録」編集委員

(順不同)

町西 渡部団正 黒田福一

南方東 菅野良知 高須賀英一 田井野重郎

委員長 渡部団正

高木助市

副委員長 菅野良知

南方西 渡部浪子 高須賀富久

委員 高須賀英一 大石茂三郎

滑川 玉井信義 小倉清郷

中川喜十郎 渡部浪子

■資料提供者 (順不同 敬称略)

☐昔話を集める会委員

(順不同)

〔写 真〕 川内町役場 教育委員会 川上小

河之内 中川喜十郎 近藤安長

学校 中山寺 樋口衛 田中大典

土谷 今井ギン 佐伯太郎 (故)中島友重

近藤守三 名越源 野口尚文 高

則之内東 渡部恒市 宇和川顕一 小倉元一

須賀英一 渡部武美 神野弘史

則之内西 大石茂三郎 高須賀平太

森正史 田部早蔵 大窪晴市

井内 高須賀秀吉 東太市

〔表紙さしえ〕 矢野信次郎

奥松瀬川 道満兵五郎 森長栄

〔題 字〕 佐伯惟揚

前松瀬川 友沢富一 高須賀久之 仙波知

〔函 版〕 菅野良知 中川喜十郎 渡部浪子

大石隆子 渡部富市

渡部団正

北方東 橋本義之 石谷沢一 高須賀忠五郎

〔監 修〕

北方西 桑原時雄 渡部国恵 高須賀薫明

民俗 重信町下林 森 正史

町東 林カツ 田中花子 田部早蔵

表記 川内町宝泉 橋本矩之



7月10日 編集委員会

ふる里の記録

年中行事篇

編集者 川内町老人クラブ連合会

昔話を集める会

発行所 川内町社会福祉協議会

発行日 昭和五十六年十月十五日

印刷所 松山市東石井町

アマノ印刷

